奥様乃肖像
パリの人
娘除交の

17-45

鳩山春子女史序

前田雪子著

巴里婦人の交際振與様の顧問

東京 博文館藏版

昭治
42 4 23
宮内

序文

生物を世界の花と言はゞ人類は生物の花なる可し人類を生物の花と言はゞ婦人は人類の花なる可し世界に花といふ花の花、花の如き一生はやがて婦人の運命ならずや

雨に悩める海棠を情深しとは言ふめれど雨に打たれ風に揉まれては花として花の面影なかる可し

世に出でゝ交はらむ程の人禮なく節なくば雨風に揉まれつ打たれたる花にも劣りぬ可し淵みたりとも花は花、禮なく節なき人を花なりと言はゞ人誰れか首肯はむ

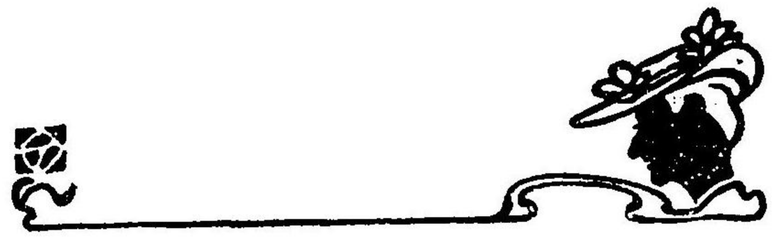
されど又思ふ「野の百合花は如何にして長つかを思へ勞めず紡かざるなり、されどわれ爾曹に告げむソロモンの榮華の極みの時だにも其裝ひ此の花の一つに及かざりき」

偽の衣を着けて麗はしと思ふ人の子の愚かさよ「豪貴學道難」と言ふ況して榮華をや況して豪奢をや貴きは人の道花とは言へど道なくして可ならんや

前田女史此たび「巴里婦人の交際振」の著あり就て見るに禮と節とを說く事餘蘊なし、女史の友に親しかる人あり來りて序を請はる己れ其人に非るを思へど此日頃思へる所に添へる節も少からねば

目次

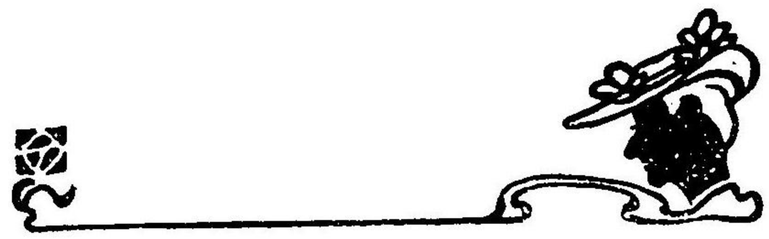
はしがき……一
第一章、巴里婦人の應對振……七
第二章　巴里婦人の訪問振……一七
(一)、儀式の訪問……一七
(二)、義務の訪問……一九
(三)、義理の訪問……二一
(四)、返禮の訪問……二一
(五)、祝賀の訪問……二三
(六)、弔慰の訪問……二三
(七)、相識(ちかづき)たる乞ふ訪問……二六
(八)、暇乞の訪問……二八



序文

蕪辭を呈して序に代ふと云爾

鳩山春子



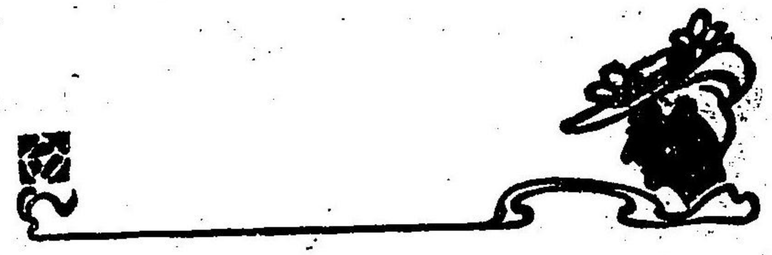
序文

蕪辭を呈して序に代ふと云爾

鳩山春子

目次

はしがき……一
第一章　巴里婦人の應對振……七
第二章　巴里婦人の訪問振……一七
(一)　儀式の訪問……一七
(二)　義務の訪問……一九
(三)　義理の訪問……二一
(四)　返禮の訪問……二一
(五)　祝賀の訪問……二三
(六)　弔慰の訪問……二三
(七)　相識(ちかづき)を乞ふ訪問……二六
(八)　暇乞の訪問……二八



目次

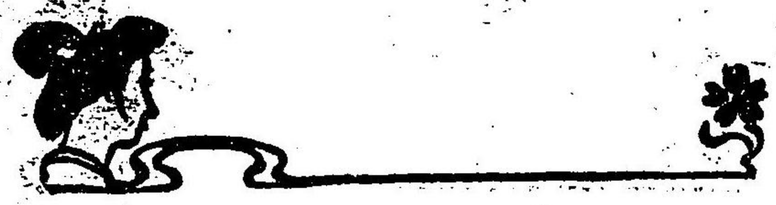
(九) 親友間の訪問……二九
(十) 病氣見舞の訪問……三〇
(十一) 年賀の訪問……三一
(十二) 訪問の時間……三三
(十三) 訪問を受くべき人々……三四
(十四) 訪問者の態度……三五
(十五) 主婦に對する挨拶振……四〇
(十六) 各種の挨拶振……四一
(十七) 握手の禮法……五〇
(十八) 訪問者の身振……五六
(十九) 紹介の方法……六一
(二十) 訪問者の身裝……六三
(廿一) 訪問者の出入法……六六

目次

(廿二) 控室に脱ぎ置く若物……六六
(廿三) 特別訪問に就ての心得……六九
(廿四) 普通訪問及接客に就ての心得……七一
第三章 巴里婦人の談話振……八〇
(一) 談話の際に於ける身振及擧動……八〇
(二) 談話を仕向ける方法……八五
(三) 談話上の禮節……九一
(四) 談話の問題……九四
(五) 談話の要訣……九六
第四章 巴里婦人の宴會振……一〇二
(一) 宴會の招待……一〇二
(二) 食堂の禮式……一〇九
(三) 座席の指定……一一七

目次

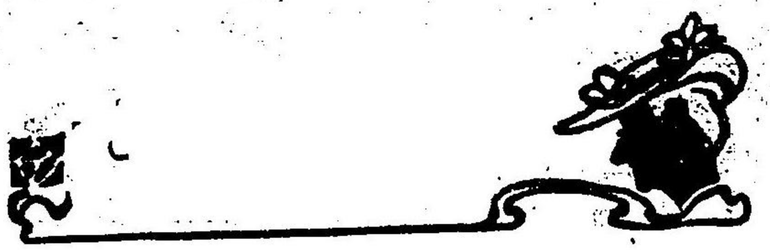
(四) 宴會の献立……一二三
(五) 食卓の敷布及食器……一二七
(六) 膳立の禮法……一三一
(七) 火宴會の禮式……一三四
(八) 親友間の宴會……一三七
(九) 食べ方……一四〇
(十) 食品を切つて供する方法……一五二
(十一) 來客の心得……一五五
(十二) 祝杯の方式……一五八
(十三) 食後の接待法……一六一
(十四) 珈琲の進め方……一六三
(十五) 喫烟室の接待法……一六五
(十六) 茶菓の饗應法……一六七



第五章 巴里婦人の夜會振及舞踏會振……一六九

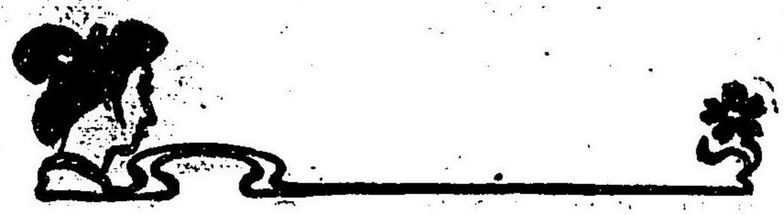
(一) 客室の裝飾法……一六九
(二) 舞踏會の準備法……一七一
(三) 夜會及舞踏會の招待狀……一七六
(四) 夜會及舞踏會最終の準備法……一八一
(五) 來賓の心得……一八五
(六) 舞踏會の服裝……一八七
(七) 舞踏の勸誘法……一九〇
(八) 舞踏の仕方……一九三
(九) 夜會の食膳……一九四
(十) 舞踏會に心得置くべき要件……一九六
(十一) 演奏會及夜會音樂……一九八
(十二) 客室の喜劇……二〇一

目次



目次

(十三) 醫人に對する作法……二〇四
第六章 巴里婦人の結婚振……二〇七
(一) 巴里婦人の結婚觀……二〇七
(二) 巴里上流社會に於ける求婚の手續……二一五
(三) 正式の婚約——結納……二二〇
(四) 正式の見合……二二三
(五) 婚約の指環……二二七
(六) 結婚の報告法……二二八
(七) 許嫁の機嫌伺……二三〇
(八) 許嫁時代の期限……二三四
(九) 結納品と嫁入道具……二三八
(十) 婚禮の祝儀……二四〇
(十一) 夫婦財產の契約式……二四三



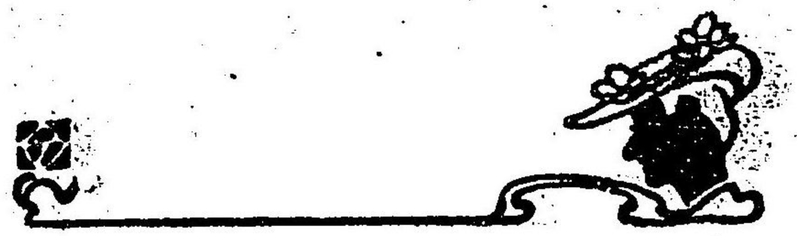
目次

(十二) 結婚式の招待狀……二四九
(十三) 法律上の結婚法……二五三
(十四) 役場に於ける結婚式……二五八
(十五) 宗教上の結婚法……二六四
(十六) 結婚行列の順序……二六七
(十七) 陪婚の男女……二七四
(十八) 寺院の結婚式……二七九
(十九) 奉納金の採集法……二八九
(二十) 聖房內の祝賀式……二八九
(廿一) 新教の結婚式……二九五
(廿二) 猶太教の結婚式……二九九
(廿三) 餘寡の結婚式——再婚式……三〇二
(廿四) 老嬢の結婚式……三〇九

目次

(廿五) 婚禮の宴會及舞踏會……三一〇
(廿六) 婚禮の男子服……三一四
(廿七) 婚禮の婦人服……三一七
(廿八) 婚禮の通知狀……三二〇
(廿九) 新夫婦の心得……三二三
(三十) 密月旅行……三二八
(卅一) 婚後の訪問法……三三四
(卅二) 巴里婦人の銀婚式……三三七
(卅三) 巴里婦人の金婚式及金剛婚式(ダイヤキンド)……三四一
(卅四) 結婚上に於ける臨時の出來事……三四三
第七章 巴里婦人の外出振……三五〇
(一) 車上に於ける巴里婦人……三五〇
(二) 遊船内の巴里婦人……三五三

(三) 劇場に於ける巴里婦人……三五五
(四) 寺院に於ける巴里婦人……三五八
(五) 途上に於ける巴里婦人……三六一
(六) 戸口に於ける巴里婦人……三六三
(七) 梯子段に於ける巴里婦人……三六五
(八) 商店に於ける巴里婦人……三六六
(九) 料理店に於ける巴里婦人……三六九
第八章 社交の要具——名刺、通知狀及招待狀……三七三
(一) 名刺の禮法……三七三
(二) 慶賀の名刺……三七七
(三) 弔慰の名刺……三七九
(四) 答禮の名刺……三八二
(五) 角折名刺……三八三



目次畢

目次

(六) 名刺の用途……三八六
(七) 誕生の通知狀……三八七
(八) 祝婚式の招待狀……三八九
(九) 宴會及舞踏會等の招待狀……三九二

巴里婦人の交際振

奥様の顧問

前田雪子著

はしがき

「なか〳〵に山の奥こそ住みよけれ草木の人の惡を言はねば」と或人が申ました、之を聞いて又或人が反對の歌を作りまして「なか〳〵に山の奥こそ住みうけれ草木の人の惡を言はねば」と積極に世渡りすべきであると示されました、成程人は社交的動物なりと云ふとは、最早遠き古から道破されました眞理で御座いますが、此の眞理は世の文明進歩に伴れまして益々眞理である

はしがき

ことを證明せられて參ります、世界の古書にも「人獨處未レ善我將ニ爲レ之作レ偶以助レ之」と書いて御座いますが是が抑も交際の濫觴で御座います、「夫婦あれば爰に交際あり」と云ふ言葉を神話的に言顯はしましたものとして視るべきであります、兎に角交際は人生自然の約束で御座います、元來人は社交的生活を送る爲に作られましたもので御座いまして、孤獨生活若くは引込主義では迚も世は送られません、一家の家庭に於てすら家庭的交際と云ふものが御座いまして、父母、妻子、兄弟相互に交際しつゝ生活して居るでは御座いませんか、されば人は所詮孤立の出來ぬもので御座いまして、此の世に生れ出でゝ產聲を揚げますと同時に社交的動物の運命を擔つて居ります者で御座います。

家庭内の交際は父母妻子兄弟の愛情に基いて致す交際で誠に親密な交際で御座いますけれども、人間の能力を完全に圓滿に發達させます爲には未だ々不充分で御座います、一生を面白く愉快に送ります爲にも家庭内の交際ばかりでは充分とは申されません、此樣譯で御座いますから勢ひ家庭の交際以外に、尙社會に廣く交際致すべき人を求めまして、相互の間に生活の利便を計り、相待ち相扶けて其の用を濟して行かなければなりませぬもので御座います、是が乃ち眞の交際で御座いまして、家庭的交際に對して申すれば社會的交際とでも云ふべきで御座いませう。

雖然交際と申ますものは人智の發達、社會の進歩と共に進運を共に致すもので御座いまして、今日のやうに國と國との交通が頻繁に成つて參りまして

は茲に國際間の交際と申すものを開き、此の道に依りまして有無相通じ、長短相補ふやうになつて參りましたので御座います。

右三種の交際を簡單な文字で稱しますれば親交、社交、國交とでも申して此の三種の交際に依りまして、人は交際の動物と云ふ眞理が愈々明に發揮せられて參るので御座います。

是は凡ての國、凡ての人に通ずる眞理で御座いますが、さて翻て之を我國に當嵌めて考へて見ますれば、日本の人にも亦人生自然の約束に依りまして、家庭的と社會的交際とは大古開闢の世から開かれて居りましたに相違御座いませんが、維新以來歐米諸國と交際の道を開くやうになりましてから、頓に其の面目を改めまして、僅か三四十年の間に長足の進歩を致しましたれば、

今迄閨門を深く鎖して蟄居的生活を送つて居られました婦人方までが續々交際場裡に立たれましたので御座います、是は確に我國文明程度の上進を示すものと申さなければなりません。

歐米諸國の中に婦人交際振の最も麗はしく、又社交法の最も完美に組立てられて居ります國は何れでありますかと申しますれば、そは佛蘭西の巴里で御座います、是は世界中で誰も異議を挾ませぬで御座いませう、巴里婦人の交際法は實に當世交際社會の花で御座います、其れ故に私は本書「巴里婦人の交際振」を著し度いと思ひますので御座います。

抑も交際と云ふことは一口に申しますれば、自分以外の人に交つて感情を交換し、智識を融通することで御座いますが、でも交際の道と申しますと頗る多

端で御座いまして、言語、應對、贈答の事より冠婚、葬祭の事まで殆と人生一切の事に關して居りますもので、交際は處世の要道で御座いますから仁愛、恩義、親切、懇情等有らゆる情誼が皆之に依りまして顯はれますもので御座います、而して彼の禮儀作法と申すものに依りまして其の法を優美、圓滑に致しますが、風俗習慣に依つて其の趣を多種多樣に致すもので御座いますから一國の風俗習慣は交際に依りまして察し得られます、又其の國の禮儀作法も交際に依りまして知ることの出來ますもので御座います、されば本書巴里婦人の交際振に於きましては巴里婦人の訪問法、談話法、贈答法など交際の要道を始めまして饗宴法、夜會法、舞踏法、婚姻法、受洗法、吊禮法、葬送法など巴里一切の禮法と風習とは悉く窺ひ知ることが出來ますので御座

います、私は成るべく彼の所謂パリジエンヌ(パリ婦人)の交際場裡に立つて居ります一舉一動を有りの儘に描寫致し度いと思つて居りますが、元來文字に嫺はぬ私で御座いますから筆の運びが意の如くなりませぬを殘念に思つて居ります。

第一章　巴里婦人の應對振

應對は人より我を訪問されました時に接する禮法で御座いまして、交際上主要の道で御座いますから、私は先づ巴里婦人の交際法を其の應對法より說き始めます積で御座います。

巴里婦人は何故交際が上手で、人の氣を反らしませぬやうに如才なく附合

つて行きますかと申ますれば、巴里婦人は主婦として來客に接します時、實に左の待遇法を行つて居りますからで御座います。

巴里婦人は接客の要訣として先づ第一に親切を旨と致しまして始終嬉し相な顔色を見せまして只管來客の機嫌を害ひませぬやうに深く注意して居ります、何か耳新たらしい事でも聞きますと、非常に喜ばしげに見えます、又氣に入りませぬ事を聽かされましたとて決して厭な顔を見せません。

自分の方からは話を向けると云ふことは餘り致しません、況してや自分の主義を通さうと致すなどのことは決して致しません、一體自分の主義を通すと云ふことは判斷が確で智識が人よりも優れて居らなければ出來ないことで御座いますから、巴里婦人は其の心得で自分は決して那麼者ではありませぬ

と深く謙遜して居りますゆゑ始終先方より出る話に答へますやうに務めまして來客に下手な長談を聽きに參りましたやうなことは決して致しません。

廣い客室に大勢來客が御座います時、主婦は其の間に立ちまして、成るべく側近くに居ります來客と來客とに話をさせますやうに取計らひまして、自分は始終後から入つて參る客を待遇する餘裕がありますやうに務めて居りますから、先に參りました客も飽くことを知りませず、又後に參る客の氣をも外らしませぬので御座います。

來客の中に無暗と見識振つて威張りたがる者が御座いまして他の來客の興味が其の爲に殺がれて了ひますやうなことが御座いましてはと、主婦は豫め自分の親類かお友達に當ります妙齢婦人を出しまして如才なく助けて貰ひま

して、其婦人に大勢の興味を殺がうとする來客に應接させまして、來客の智識と嗜好に應じますやうな話を致させますので御座いますが、其れは〳〵實に巧な致方で御座います。

けれど主婦が一人のゝときには此等の事までも皆んな自分が上手に取計らつて行かねばなりませんから、其時には成るべく嗜好の同じ客が一緒になりますやうに致して、芝居好きの人は芝居好きの人と、旅行好きの人は旅行好きの人と寄り合ひますやうに取計らひ、其の上で一群の客の心が奪はれさうな話を持出すので御座います、例を申ますなら、芝居好きの來客に向ひましては新に興行せられました外題を持出しますとか、人氣役者になつて居ります者のことを話出します時は同好の來客は皆さん其方に心が奪はれて了ひます、若

し來客の中に旅行好きの方が御座いますならば、最近旅行して來られました來客に旅行の趣味や名所古蹟の話をさせますやうに話を持ちかけますから、旅行好きの來客は孰れも皆んな其客の話に耳を傾けますやうになつて參るので御座います。

今日では接客の日を定めまして、其の日に限りまして面會致すことが巴里の婦人社會一般に行はれて居ります、是は富貴婦人社會に限りましたのでは御座いませぬ、町家の婦人社會にも廣く行はれて居る風習で御座いますが、此の風習は主客に都合の好いことで御座います。

田舍などに居ります婦人は面會日を月一回位に定めて置きますけれども、巴里では一週一回少くとも月二回は必ず面會致すことに定めて置きます。

面會日を月曜日に致しますか將た木曜日に致しますかは銘々の勝手で御座いますが、月二回に定めて置く婦人方は多く一日と十五日に定めて置かれます、婦人に依りましては面會日を名刺の下の方にチャンと記して置かれる方も御座います。

主婦は幾ら大勢の下女下男を召使つて居りましても、自分の客室を裝飾準備致しますには自身で之を監督して致させます、其れは自分の役目と思つて居りますからで御座います。

客室には花を彼方此方に飾付けまして洵に見事に致して置きます、主婦自分が飾りますことも御座います、室内の溫度は適宜の程度に保ち、夕方になりますと燈火は直ぐに點られますやうに支度致されて居ります、暗黑に話をし

て居りますほど不愉快な事は御座いません、若し電燈の設けが御座いませんなら、豫め洋燈を用意致して置きまして、主婦が燈火と言はれます一聲で直ぐに點火して室内が急に光明くなりますやうにして置きますから實に愉快で御座います。

よく行屆いて居ります家では、一人の召使は始終控室に居りまして、先づ訪問の方がお出になりますと、戸を開きます、而して來客の脱ぎました外套などを始末致して居ります。

主婦は面會日には三時頃から來客に接します爲に客室を開けて置きますのが規則で御座いますが、名刺の上に面會日と時間とを記して置かれる婦人方は大抵五時から六時までの間で御座います。

主婦は美しく化粧をして居りますけれども、餘り華美に流れませぬやうに氣を附けて居ります、何せと申ますれば來客の中には質素の身扮裝をして參る人も御座いますから、華美な服裝を致して此の來客を迎へますのは先方を耻めますやうに當ります、で主婦は其邊によく注意して居ります。

客に接しますときは手袋を嵌めて居りません、是は隨分八釜しく云はれた問題で御座いますが、今日でも手袋を嵌めませぬ風が勢力を有つて居ります。

主婦の座席は暖爐の隅の方で御座いまして、逆に光線を受けて（日光に背いて）居ります、來客が婦人か、老人又は僧侶で御座います時は、立つて迎へなければなりませんが、男子の客で御座いますならば座席に坐つて居る儘で之に接します。

來客が多人數で椅子が不足になります場合には男子は立つて居るので御座います、客の歸ります時主婦は男の客なら一寸立つて送り、婦人の客なら客室の戸口まで送つて參ります。

序に盛大なる接待法に就て申ますが、盛大なる接待法と申ますのは、舞踏會、夜會、結婚披露會、壽筵、又官吏社會に於ては宮中の盛宴、大臣の宴會其他貴顯紳士方の催に係る大饗宴を指すので御座いまして、此時は日頃交際して居ります人々は悉く招待致すので御座います。

外國の大使が信任狀を國主に捧呈致しまして各國の大使を訪問致しました後にも盛宴を開きますのが例て御座いまして此時には時として國主も親しく臨御致されますことが御座います。

他にも又盛大なる接待が御座います、其れは大將に昇進しました時、若しくは知事に任命せられました時などに開きます盛宴で御座います。

母が自分の息子又は娘を伴れて行きますときには、單に「是は私の息子で御座います」「是は私の娘で御座います」と申まして先方の母親に紹介致します。

盛大なる舞踏會を開きますときには多く友達を招待致しますと同時に其の友達の家族も招待致します、一向知らない人をも招待致すことが御座いますが、其時には宴會の前に一々紹介を致す規則になつて居ります。

大宴會の時には、食堂に入ります前に食卓に近く居並ぶ人々を紹介致すのが禮で御座います。

第二章　巴里婦人の訪問振

巴里婦人の訪問法を述べます前に先づ訪問には色々の種類が御座いますことを申さなければなりません。

(一)儀式の訪問

是は文官、武官の間に行はれますところの公式の訪問で御座いまして、年に一度又は赴任などの時に行ふ訪問で御座います。

官吏が一町村に住まつて居りますときにも、相互の間に此の訪問を行はなければなりません。

讀んで字の如くにほんの儀式上の訪問で御座いますから、訪問の時間は短

くて宜しう御座います、僅か十五分位で澤山で御座います、餘り短過ぎますやうに思はれますが、是でも一年に二度か三度位顔を合せ、又は全く一面識もない人々の間に話を續けますことは中々六箇敷う御座いますから十五分間にすら話の種が盡きて了ひますことが御座います。

けれども此時の訪問が相互の同情より若くは意氣の投合よりしまして度々愉快な交際に變じて了ひますことが御座います、其時には儀式を離れて親しく訪問致すやうになりますけれども、さりとて儀式は儀式としてちやんと守らねばなりません、特更長官に對しまする禮法は中々八釜敷う御座います。

此時の訪問には婦人は立派に裝ひ美服を着けて參らなければなりません、訪問致します人が武官で御座いますれば軍服、文官ならばフロクコートを着

ますのが禮で御座います。

此の訪問は八日間の内に行はねばならぬ規則で御座いまして、良人が留守で御座いますときには夫人が其の代理を務めなければなりません、若し此の規則に背きまして延引致す者が御座いますれば、禮法を知らないものと云はれます。

若又病氣とか死去とかの事變が出來しましたならば、規則内に行ひますことを免除れますけれども、其の事變の事狀を具申なければなりません、又事實が過ぎまして後成るべく早く訪問致さなければなりませぬ規則で御座います。

(二)義務の訪問

訪問には色々御座いまして、交際上是非とも行はなければならぬ訪問が御座います、之を義務の訪問と申します。

義務上の訪問の中に、第一は御馳走に招待してくれました人に對する訪問で御座います、是は後にも記しますが、返禮の訪問と申します。

次に合巻式に招待致されました時新郎でも新婦でも孰れかの父母を訪問しますことは義務で御座います。

前に申ました文官、武官、長官に對して行ひます所の訪問所謂公式上の訪問も矢張此の部類に加入るべきものと思はれます。

祖父母に對して行ひます所の恩愛の心から出まする訪問も義務上の訪問で御座います、是は正月元日の前日大晦日に行ひます、其時は父母、伯父、

伯母などをも訪問致します。

正月の初めの一週間内には親族を訪問致し、十五日までの内には親友を訪問致しますが、普通の交際をして居ります人に對しては正月の内にさへ行ひますれば義務が濟む譯で御座いますが、年賀の訪問を月の終りまで延しますことは僅に恕されるので御座います。

(三)義理の訪問

是は全く交際を絶たぬ爲に、年に三四回行ひます所の訪問で御座いまして此の訪問は面會日に致すので御座います、時間は僅か十二分位で御座いまして、此の訪問を受けました人は矢張り記帳面に返訪致さなければなりません

(四)返禮の訪問

人から世話になりました時は、直ぐに手紙を認めて御禮を述べます、而して一週間内外の内、返禮に參るべき筈で御座います、若し先方が目上の方でありますれば、他の訪問者の行きませぬ前、成るべく時間を早めて訪問致しますのが禮で御座います。

饗宴に預りましたときに返禮に行きますので御座いますが、此の訪問は招待に應ずることが出來ませぬ場合でも參らねばなりません、但し主人の方では返訪の義務は御座いません。

(五)祝賀の訪問

常に交際して居ります人が勳章を受けましたとか、又は重要なる位地に就いたとか申すお目出度い時に之を行ひますが、然し日頃親しく交際して居り

ます人で御座いませんければ無暗に之を行ひません、茲には頗る愼重の態度を取らねばなりません、何せと申ますれば餘り急いで之を行ひますときは何か利益上の考から出ましたと思はれてはいけませんから、婚姻でありますときにも、此の祝賀の訪問を行ひますことが御座います、例へて申ますれば子供の生れたとか、又は失望して居りました病人が全快致しました時には、其を聞き次第直ぐに慶賀に參る筈で御座います。

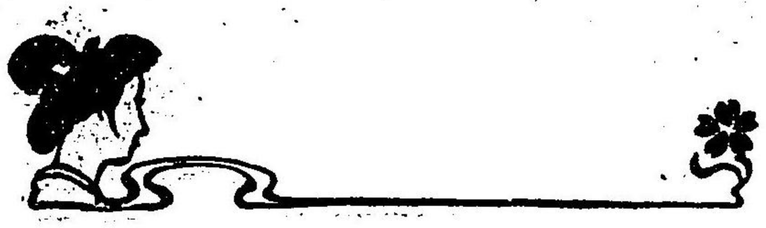
(六)弔慰の訪問

是れは以上記しましたものとは全然性質を異にして居りますから、急いで行へば行ひますほど歡んで迎へられるので御座います、けれども日頃親しく

交際して居ります人に限つての話で御座います。

左もなくば、弔慰の訪問は、不幸が御座いまして後六週間内に行ひます、所謂是は儀式的弔慰の訪問で御座います、此の訪問の時には成るべく輕卒の擧動を避けまして質素な服裝で、重々敷行はなければなりません、黑服を着けますのが例で御座いますが華美な服は用ゐていけません、此時は自分の方から死んだ方に就き話を致す筈では御座いません、先方で話を始めましたらば同情を寄せて聽きますのが禮で御座います。

弔詞を述べる訪問は他の訪問と違ひまして成るべく簡單に致し單に名刺を置いて濟むことも御座いますが、若し室に通されましたならば、婦人同志若くは男同志のときには抱合の禮を致しますけれども、男女性を異にして居り



ますときには親しく握手の禮を致します。

弔慰の訪問には面白い事や可笑い事などを話しませんやう注意して、成るべく遺族の慰安になりますことのみを話すので御座います、男子の服裝はフロックコートと黑色の手袋が禮で御座います。

若し自分の方にも不幸が御座いまして、弔慰の訪問に參りますことが出來ぬならば、手紙で以て弔詞を述べます。

知己とかお友達とか失敗や破産を致した時、又は位地を失ひました時などは、矢張弔慰の訪問と申て訪問致します、斯樣な場合には友誼、交情の變りませぬことを表明ます爲に成るべく急いで訪問を致すので御座います。

弔慰の訪問のときには決して子供を伴れて參る筈では御座いません。

(七)相識を乞ふ訪問

移轉しましたとき、土地の人々と親近になります爲に訪問致します、村長住寺、公吏或は病氣のとき診察を賴む醫者などに對して之を行ふので御座います。

此の訪問を致しますときには、御近所に引越して參りましたから、宜敷お願ひ致しますと簡單に挨拶を述べまして、多少自分の經歷のやうな事を話して歸るので御座います、先方に自分の經歷を知らせます時は先方も安心致して將來何う云ふ風に交際致して可いかを知ることが出來ますから。

若し面識致し度と思つて居ります人に會ひませんければP.F.C.と記した名刺を置いて參ります P.F.C. は pour faire connaissance の首字を取りました

ので御座いまして、直譯致しますれば「お近附になる爲、」即ち宜敷お願ひ致します爲にお訪ね致しましたと申す意味で御座います。

此の訪問には多くは丁寧に返訪致しますのが禮で御座いますが、餘り親しく致し度う御座いません時には單に名刺を置きまして歸りますことも御座います。

會ひませうと否とは銘々の勝手で御座います、同情と申すものは命令的に出來ますものでは御座いません好き相な方と思ひましたら、近附になりますが宜し、餘り感心の出來ぬ人と思ひましたら、交際致さずとも宜しう御座います。

村長、住持、公吏などは返訪を致す義務が御座いません、けれども、訪問

致したところの人も公職に就いて居りますれば返訪致さなければなりません。

外國に居りますときは領事に顔出して置きます方が何かに就て都合が好う御座いますから、一度は訪問致して置きます方が宜う御座います。

（八）暇請の訪問

旅立を致しますとき、知己やお友達の家を訪ねまして訣別を告げ、自分の留守になりますことをお知らせ致しますのを暇請の訪問と申ます。

是は豫めお知らせ致しませんと、お友達が折角尋ねて參られました時徒足になります、特に遠い所からわざ〳〵尋ねて參られます方には實に氣の毒で御座います。

若し訪問先の人が留守で御座いますればP.P.C.の三字を記しました名刺を遺して參ります、此の三字はpour prendre congéの略字で御座いまして、「暇請をするが爲」と申す意味で御座います。

但し歸國の時にも訪問致しまして知己やお友達にお目に懸り度き意を示しますか、時々は出立の時にも歸國の時にも先方へ名刺だけを置いて參りますことが御座います。

世は益々複雜になつて參りまして、日に月に繁劇になりますから出來る丈け簡便に致しましても可いやうになつて參ります。

（九）親友間の訪問

別に規則は御座いません、訪問致し度い時に訪問致し、時間も制限があり

ません、長坐致し度い時は長坐し、早く歸り度いと思ひます時は早く歸り、結局は何等の禮法にも拘はりませぬが、幾ら親しう御座いましても先方の邪魔にならぬやうに氣を附けなければなりません。

（十）病氣見舞の訪問

此等の訪問は皆義務上の訪問の中に加へますことは出來ません、けれども訪問先の家で病人でも御座いまして退屈して居りますならば、定まつて訪問致し、出來得るなら、何か病人の心を慰めますのは即ち新刊書、新聞、初物花木等を持つて見舞に參りますのが一種の義務と視做されて居ります。

さりとて病人が面會を謝絶致しますなら、無理に面會を求めやうと致す筈では御座いません、其時は名刺だけを置いて後日又お訪致す積で歸る筈で御

座います。

日頃左程親しく交際して居りません人なら、名刺を差出すのみで澤山で御座います、先方の病氣の容態を聽きに遣り又は自分で聽きに參りますなどは結構で御座いますけれども、病人の側まで通して貰ひますことは遠慮致さなければなりません。

（十一）年賀の訪問

數年前までは年賀の訪問は大晦日に祖父母や長上者に對して行ひましたが今日では正月元日に之を行ひます、家族的には元日に相集ひまして之を行ひます、公式の年賀は早朝から長上者の邸宅に參つて行ひます、夫れから親族や朋友を訪問致します、元日に際會致す人々に向ひましては「新年お目

出度う御座いますと申ますが、次の日からは別に之を申ません、申せば何だか可笑く思はれます。

年賀の訪問は若夫婦の方から始めますのが禮で御座います、隨て婦人も年若の方が年長の婦人を訪問致して行ひます。

年賀の訪問は正月中に行ひませば可いので御座います、初めの一週間には親類を訪問致し次に親友を訪問致し、夫から通常の知己を訪問致します。

正月は友達の家にでも子供を伴れて年賀に參る筈では御座いません、お菓子でも貰ひに行きましたやうに思はれるといけません、けれども年取つた婦人が特別の親切で取扱かつて呉れられますなら、祖母の如く思つて元日に子供を伴れて參りましても宜しう御座います。

元日に訪問致す人の家には名刺を置きません、御面會の出來ませぬのは誠に遺憾で御座いますと取次を以て傳へさせます、又同週の中に今一度訪問致しますが、若し其れすら出來ませんければ心情を凝めた手紙を認めて送ります。

(十二)訪問の時間

訪問は儀式であればあるほど其の時間を短く致しますのが禮で御座います。

公式の訪問は常に八分か十分位を適當と致し、其れより以上は長座致す筈で御座いません、元日に行ひます所の公式の訪問は凡て短時間を旨と致し、十分間以上に亘りませぬやう心掛けなければなりません。

儀式の訪問は長くて十五分間、義理の訪問も同様で御座います。

其他弔慰の訪問、祝賀の訪問、返禮の訪問等は十五分より二十分の間に致します、是は多く親疎の程度によつて、決する筈で御座います。

けれども何か大切の用事があつて訪問致しますとか、又は特別に親しい人が訪問致します場合には豫め時間を制限致す譯には參りません。

（十三）訪問を受くべき人々

訪問を受くべき人々は、長上者、祖父母、朋友、知己と其他敬禮を盡すべき人々、若くは不幸に遭遇ました人々などで御座います。

病氣中見舞に參られました人々、若くは病氣中色々心配を致して呉れました人々にはお禮の爲に訪問に參らなければなりません。

人から紹介せられまして後二人の婦人が近附きになり度いと思ひ、相互に招待するやうになりましたならば、先に招待を受けました方が第一番に訪問致さなければなりません。

人から世話になります事が御座いましたら、禮狀などよりも自身訪問致してお禮を述べますのが當然で御座います。

人を訪問致しました時、先方が留守で名刺ばかりを置いて歸りましても、再び訪問致しますには、先方から返訪せられますまで待つて居る筈で御座います。

（十四）訪問者の態度

訪問を致す人は盛裝美服して出ます筈で御座います。男子は無論フロック

巴里婦人の訪問振

コートを着用し、帽子を携へまして客室に入り、訪問中手から離しません、但し訪問が長引きました時で御座いますとか、或は手を自由に致さねばならぬ場合とか、若くは何か手に取り上げて見ますものが御座いました時は此の限りでは御座いません、此時若し主婦が帽子をテーブルとか又は何かの臺の上にお置き遊ばせと云はれませんければ、帽子を自分の腰掛けて居る椅子の下にソット知れぬやうに置く筈で御座います。

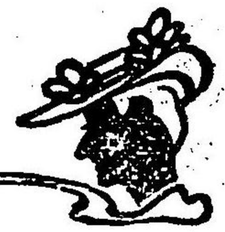
帽子を手に持つて居りますときは内の方を見せぬやうに持つて居らねばなりません、男子でも訪問の時には少し容子振つて衣貌を作るので御座います、鄭寧親切でありますれば必ず善く迎へられます、若し主婦が一人で兼客に應接して、送迎に遑が御座いませんやうな場合には、婦人訪問者の出立致

します時設令識らぬ人で御座いましても、立つて自ら客室の戸を開けて上げる位の親切を盡す筈で御座います。

訪問者の態度と致しまして實に不規則で御座いますことは冬期煖爐の前に立つて火に背を向けて居ることで御座います、是は男子の訪問者が氣を附けずによく致すことで御座いますが、暖を自分一人で專有致しまして人が暖まるのを遮りますから、頗る利己的不遠慮の舉動で御座います。

近くに在る鏡の前に立つて頻りに自分の姿を見て化粧しますることも無禮で御座います。

何かを手に持たなければ話をすることが出來ぬと云ふ訪問者が御座います時には非常に主婦に心配致させます、何んでも自分の身邊にありますものを



奥様の願問

手當り次第いぢる癖で御座いますから、貴重な品などが手に落ちました場合には主婦は何う致しますかと思つて非常に心配して居ります、特に破れ易いもので御座いますれば尚更心配致して居りますが、さりとてお止し遊ばせとも申されませず、獨りで氣を揉んで居りますがお客樣の方は何の氣もなくそれをいぢつて居りますのは迷惑で御座います。

年若き婦人の訪問致しますとき、若し來客が大勢で御座いませんければ、煖爐の近くに居る主婦の側へ參りまして座を占めましても可う御座いますが、年長の婦人が參られましたならば、知れないやうに立つて座を下る筈で御座います（他の椅子にそつと移る筈で御座います）但し禮儀上煖爐に近い方が上座で御座いますから。

年若い訪問者は男女に拘らず肱掛椅子に腰を掛けぬものと心得て居らねばなりません、又年長者よりも煖爐の方へ近く座を占めぬやうに注意致さなければなりません。

幾らおとなしい子供で御座いましても訪問の時に子供を伴れて參りますことは宜しく御座いません、小さき子供は束の間も動かずには居られません、話中に子供が騒々しく致しては實に五月蠅う御座います。

けれども先方に子供のありますときは此限りでは御座いません、人は子供に對しまして可愛がる心のあるもので御座いますから、少々位八釜敷う御座いましても何とも思ひません、五月蠅う御座いましても恕して置きます、特に先方にも子供が御座いますときは子供連れで別室へ行つて遊びますとか又

はお庭にでも出て遊んで居りますから、左程厄介になりません、其間女中が附いて居りますれば尚安心で御座います。

（十五）主婦に對する挨拶振

訪問者が客室に入りますや否や先づ第一に注意致すべきことは主婦に對する挨拶で御座います、入りますや否や主婦にのみ目を注ぎ、外の者を見てはいけません、直接主婦の方へ向つて行きまして他の人々をば見て見ぬ振を致すので御座います。

男子でありましたなら主婦の前に首を少し傾けて挨拶を致しながら主婦の健康を伺ひます、尚又座に就きます前に主人の起居消息をも聞く筈で御座います。

婦人の挨拶振も之と同樣で御座いますが、主婦は婦人の方には挨拶が濟むか濟まぬ内に早くも「おかけ下さい」と勸めます。

（十六）各種の挨拶振

實は今日の挨拶振は重々しい風をも、優美な風をも餘程失つて居ります、現今の流行が此の方面に餘り重きを置きません、隨分無遠慮な風になつて參りましたが、でも、紳士淑女の美風を存して居ります所が御座います。

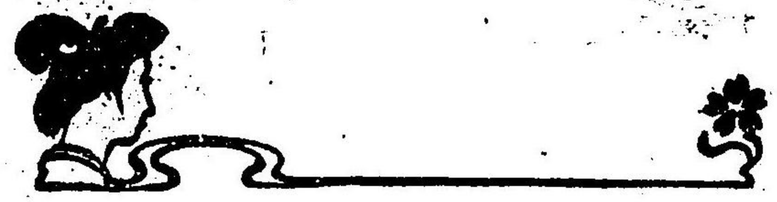
佛王ルイ十五世とルイ十六世の御宇は實に盛世の時代で御座いました、挨拶を、一種の制度の中に加へて居りました、人に接しますや否や直ぐに三角帽を脱ぎ、深く敬禮致しまして、半身を右脚の下まで屈め、左の手で廣い衣の裳を排して、除々と身體を上げ、帽子を左の腕に投げるやうに致して挾み、

巴里婦人の訪問振

右の踵を左の踵の方へ寄せながら、身を眞直に致したもので御座います、其挨拶振が男子には如何にも美しう御座いました、されば之を立派に行ひます爲、特に帽子を投げますときに上手に之を受取るやう餘程稽古を要しました。

男子の敬禮が斯うも立派で御座いましたから、婦人の優美な挨拶振は實に何んとも申せませぬ程美しう御座いました、それが婦人社會に一般に行はれますやうなりまして、小さい時から之を稽古致しました、又此の時分には少女は婦人の手に接吻を致して敬禮を表しました、此の風が若い女子に及ぶやうになりまして後は接吻だけを廢しました、其れから此の敬禮は妙齢女子の間に盛んに行はれました、特に既婚婦人の間に盛んに行はれました。

若い婦人方は此の敬禮を巧に稽古致しまして祖母、大使夫人若くは宗教界



の高僧などに挨拶致しますとき此の禮を施しました。

只今では此種の敬禮は古風に屬して了ひましたが、一種の紳士氣取りの人人が一時又之を行つて居りました、けれども之は餘程上手に致しませんと却て可笑う御座います、又之を行ひます人が此の敬禮を行つて居る社會に屬して居る人で御座いませんと、褒められますよりは寧ろ非難致される方で御座います。

手に接吻をします敬禮は上流社會の紳士貴婦人が再び之を行ひますやうになつて參りました、之を行ひますには客室に這入りました時、恭しく主婦の面前に頭を低げまして主婦の細い指をそつと接吻致すので御座います、此の禮式は敬愛を表はす徴で御座いますから、身分や年齢共に此禮を行ひまし

て差支のない婦人に對するときで御座いませんければ行つてはいけません、又是は訪問若くは夜會などの節に唯一度だけ行ひますので御座います。

老人が少女の大きくなりましたのを見ましたとき、又は之に對して親の愛情を有つて居りますとき此の敬禮を行ふことが御座います。

近頃流行の敬禮で御座いますが、小い男の子供が母親の客室に參つて居ります婦人の客の手に接吻して敬禮致します、是は實に可愛らしう御座います。

男子が途中で婦人に會つて話を致しますときには、必ず帽子を手に有つて話し、婦人の方からは「何卒帽子をお召し下さい」と申す筈で御座います、特に話をしかける人が老人で御座いますれば直ぐに帽子を被るやうにすゝめなければなりません。

挨拶を致します男子で御座いまして若し卷煙草を咬へて居りますれば先づ其れを口から取りまして、帽子を頭の邊まで取上げ、腕を少々曲げ、身體を輕く屈げまして敬禮致すので御座います、此の風は實に優美で御座いまして、今日或る少壯男子が首を眞直に折つて鄭寧な敬禮を致したと思つて居ります所の器械の樣な挨拶振とは比べになりません、交際後十日と經ちませぬ内に目を細くして微笑を漏しながら婦人に挨拶致すのを悦ぶ人が御座いますが、是は失禮なことで御座いまして美しい教育を受けました人々の非常に厭がります、何れに致しても紳士社會の優美な敬禮を行はねばなりません。

男子の挨拶振は優美な風を示しながらも尊敬の心を之に印刻して置く筈で御座います。

男子の方から此のやうに鄭重な敬禮を表明して婦人に挨拶致しますときは婦人を何れ程優遇すべきものでありますかと云ふことは誰にでも分ります、婦人も亦斯う男子の方から敬禮致されまして、益々鄭寧、親切に答禮致すで御座いませう。

年若き婦人が男子に失敬な擧動を致すことは殆と日々見受られますが、それは男子が婦人室に入りまして鄭寧な挨拶を致しますのに之に答禮するのを厭がつて居ります、男子の方では婦人に對して特に敬禮を表はします、其前に肅然として身を屈めて居りますのに、婦人の方では眞直に立ちました儘、僅かばかり頭を動かして、それで答禮致した積りで居りますのは餘り男子を輕蔑する致方で御座います。

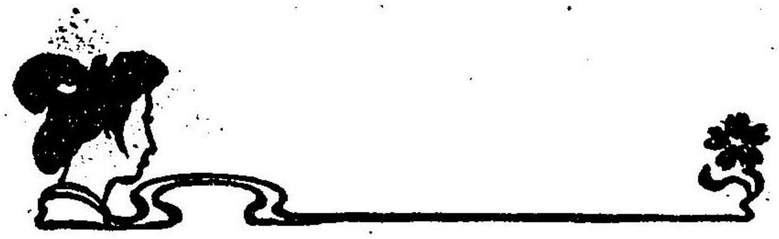
今日の婦人は何故頭を麗はしく低れ、體を優美に屈めて拜するやうな姿勢を示して答禮致さぬので御座いませうか、上流社會の鄭寧なる貴婦人は皆斯のやうに致します、優美なる風と鄭重なる敬禮とを合調ねばなりませぬと心得まして、交際術と申すものは威張つたやうな可笑な挨拶振りでは行はれるもので御座いませぬと承知して居りますから。

右は婦人が男子に對しての敬禮に就いて申しましたので御座いますが、婦人同志でも年長の方に挨拶致しますときには、鄭寧に身を屈めまして答禮致す筈で御座います、年長の男子に對しましては自分の方から先きに挨拶しますか、或は同時に行ふ位に氣を附けて居らなければなりません。

本統の紳士でありますれば婦人又は年長の男子に出會ひましたとき、直ぐ

に帽子を取りまして、其の人々の通り過ぎました後で御座いませんければ、帽子を被りません、若し其時婦人又は年長者が立止まつて話を致しますやうな容子を見ましたならば、半身を屈めて、帽子を額の邊まで取上げ、鄭寧に敬禮を表明しながら、「帽子をお召し下さい」と云ふ言葉を聞きますまでは待つて居ります。

婦人が途中で自分に紹介されました男子と初めて出會ひましたときには少少頭を低れて何某でありますかを知つて居る風を示す筈で御座います、又先方で挨拶致しましたときには欣んで之に答禮を致ますのは禮で御座いますけれども其次ぎに出會ました時には今度は男子の方から何夫人、何令嬢であるかを知つて居ります風を示し始める筈で御座います。



婦人が早朝外出致しました時は之に挨拶致しませぬのが禮で御座います、けれども婦人の方から知つて貰ひたいやうな容子を示しましたならば此限では御座いません、其譯は婦人が早朝外出しますのは、何かの慈善事業とか又は宗教上の敬虔なる勤業に從事致します爲と思はれますから、設令其目的が結構で御座いましても、其の事業が顯はれませぬやうにして陰德を行はせますやうに致さなければならぬ筈のもので御座います。

田舍道などに男子が一人若くは數人の婦人に出會ました節には、之に挨拶を致して、必要な場合には保護して上げるやうな風を示しましても差支御座いません。

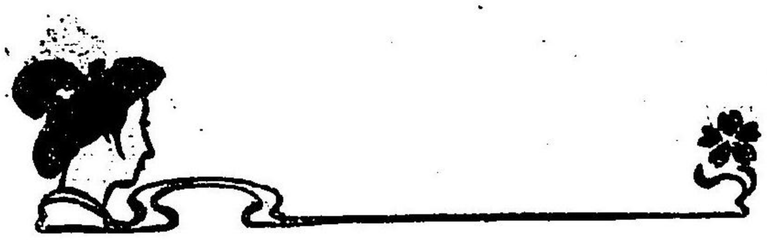
數人の男子が一人の婦人と共に途中に居りましたとき、其の男子の中の一

人が挨拶せられました場合には凡ての男子は皆答禮致しませんければなりませぬが婦人のみは遠慮して控へて居ります。

(十七)握手の禮法

握手の禮は洵に優美なもので御座いましたが、英國の乾枯無味の風が這入りましてから、全く趣を變へるやうになりました。

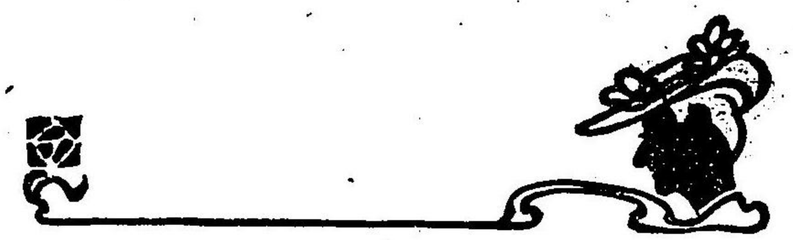
それに致しましても、握手の禮は愛情若くは誠實を表はす道で御座いますから、誰に對しましても一樣に施す筈では御座いません、謹愼深い人は容易に此の禮を施しません、濫用の結果つまらぬ挨拶に化つて了ひますといけませんと思つて居ります、昔は手を目の上まであげまして握る風が流行りましたけれども、今日では手を伸ばし、掌を廣く開けまして上から下の方へ强く



握りしめますのが流行ります、手を握つて居りますこと凡そ二三秒の後急に手を落して了ひます。

手の抑揚法には鄭寧、親切、愛情、保護等を表はしますところの色々の法が御座いますから、急いで手を出しません人には餘り親し過ぎぬやうに餘程用心を致しまして手の握り加減に注意致さねばなりません。

同年齡同身分の男子で御座いまして度々往來致して知己になつて居りますならば、若くは兩方に懇意に致して居る友達から紹介されますならば、兩方から手を出し合つて鄭寧に二三秒間握つて居ります筈で御座います、けれども餘り同情を顯はさうと思ひまして指も折れよとばかりに握り詰め、特に大きな指輪などを嵌めて居りますとき餘り堅く握りました爲に痛苦を感ぜしめ



ますやうな風は避けなければなりません、況して婦人と握手の禮を施しますときには握り方を餘程加減致さなければなりません。

挨拶致す人の手を餘り長く握つて居りますのもいけません、けれど唯一の場合にばかり懇情の深き表彰として許されて居ります、それは元老、顯官又は文壇か學界の先輩が後進の人に對して之を行ひますときは親切に保護を加へまして將來長く交際してくれます徵と見て宜しう御座います。

先輩でありまして冷靜で謹慎深い人が後進の者に特別の情を示しまして、其の手を自分の兩手の中に挾んで長く抑へて居りますのは非常の好意を表明する徵候で御座いますから、後進の者に取りまして、之ほど嬉しいこと、之ほど難有いことは御座いません。

されば此握手法ほど人物の奬勵に資するものは御座いません、世間には之が爲に勵まされまして大家になりました者が幾人御座いますか分りません。

手を出しますときは正直に出さなければなりません、指を二本か三本のみを出しますのは、失禮で御座います、指を悉く伸ばし出し、人が自由に握りますやう致しますのが可う御座います。

握手に依りまして人の正直でありますか、不正直でありますかを知ることが出來ます、此方から手を出しますとき先方で極めて輕く之を握りまして、毫しも緊る感を與へませず、殆ど無感覺のやうにして居りますれば其の心の不正直な事が明かに知れます。

誰にでも分ることで御座いますが、手を握ることはよく注意して居ります

ときは面白い研究材料となりますもので御座います、之に依りまして人の性格や氣質をも知ることが出來ます。

知らぬ人は無論一回位逢ひました人にでも手を出す筈では御座いません、交際が成立ちますか成立ちませぬかを須臾く待つて考へなければなりません

されど、双方の同情が出て參りますれば手を出しまして差支御座いません

さなくば手が自然に出て參ります、確かに歡んで迎へられますから。

又設令初めて面會致す人でありましても、友達から遣されました人で御座いますれば、親切の心から握手致すことも御座います、此の握手の禮は友達に對しまして友情を示す道となりますので御座います。

西洋の交際法では、婦人は男子よりも優れて居りますやう看做します、何

事にも上席の權を婦人に與へて置きますから、男子に手を出しますのも婦人の方から始まるので御座います。

男子は特別の許可が御座いませんければ婦人に親しく手を出すものでは御座いません、それ故男子は六十歳に成りますまでは若き婦人のみでなく、年寄りの婦人にも手を出す筈では御座いません。

若き娘は母の手本に見習らひまして、握手をすることを許されて居ります人にのみ手を出すので御座います。

若き婦人は年上の婦人の手を出すまで待つて居りまして、自分の方から先きに手を出す筈では御座いません。

西洋では坊さんが非常に尊ばれて居りますから、婦人は坊さんに逢ひます

とき、坊さんの方から先きに手を出します、婦人はそれを待つて居ります、けれども貴婦人又は城主夫人などは村の寺の坊さんを親切に接待致します爲に、自分の方から先きに手を出しますことが御座います。

婦人などを使つて居ります人は、生活上長上者と看做されて居りますから男子でも婦人の先きに手を出します、是は親切に世話して呉れます徴候になります。

之と同じやうな理窟上から、姉は母の留守のとき弟妹の教師に愛嬌を以て手を出しますことが御座います、此の親切なる禮は巧に行ひますと非常に麗はしう御座います。

（十八）訪問者の身振

談話の際に無暗に身體を搖りましたり、人に依つては手や足などを動かす癖がありましたり、チャンと立つて靜に話を致すことが出來なかつたり、或は坐りましても足を交叉させましたり、又は絶えず彼方に動き此方に動き、其外一々數へ立てることが出來ませぬが之に類するやうな馬鹿げた擧動は孰れも皆高貴の人の品位に合はぬことで御座います。

如何なる感情でも成るべく抑制しますやう務めねばなりません、悲みだの喜びは可笑く擧動に現はしませんでも、能く之を示すことが出來るもので御座います、幼時の教育の結果で感情の抑制も出來ますから母親は幼少の時から子供に之を教へねばなりません。

母親が子供に向ひまして「ちやんとなさい」「もつかりなさい」と申す言葉

は品性教育上思ふより効のあるもので御座います。

子供が不規律に彼方へ參りましたり、此方へ參りましたり、歩きながら身體を曲げましたり、屈めましたり、又は食卓に就くときは兩方の肱を食卓の上に突きましたり致しますのは、若し氣を附けませんと漸々不規則になりまして身の締りが附かなくなつて了ひます、之に反して幼時から絶えず風儀の惡いのを矯正致しますやう注意してやりますれば、身體が未だ柔かなときで御座いますから、自然に姿勢が正しくなるもので御座います。

餘りに姿勢を正しくしやうと思ひまして擧動を抑付て了ひ、身體を棒のやうに堅く致しますのもいけません、何等の動作もなくなつて了ひますれば身體の調和と申すものもなくなつて了ひますから、頭だの、手だの、又腰から

上の半身などを適宜に動かして、優雅なる擧動を以て談話を助けますやう致しますれば擧動自らも立派に心情を顯すものとなります、唯馬鹿々々敷い身動きを抑制致すやうに氣を附けますれば可いので御座います。

婦人に依りましては餘り目を上にあげまして人が話する度毎に氣絶でも致しますやうに見え、弱つた顔付を致しますのは、氣取る積りでも御座いませうが實に可笑しいばかりでなくじれつ度う御座います。

顔付には麗はしき心情をのみ顯はしますやうに致し、自然に微笑を湛え、餘り無理な作り方を致しませんやう氣を附けなければなりません。

亞米利加人は身振に重きを置きまして、手袋の置き方、顔に手の當て方、衣の持ち方、傘又はステッキの持ち方、扇の遣ひ方などより目又は口の開け

方、閉め方などを細やかに「擧動術とも申すべきと」敎へて居りますが、是は實に訪問者の學ばねばならぬもので御座います。

此等の人爲的擧動を致しました後精神を休めます爲には、暫らく身を伸ばして一時不動の狀態に入ります、而して目を瞑りまして何事をも考へず、身心を共に休養致しますときには、神經が再び彈力を回復致して參ります、若若敷い容子を保つて行く爲には、此の方法が一番好いと申します。

婦人が年を取りまして後、此等の禮法を學びませうと思ひましても、中々身體が自由になりませんから、身振を美しく致し度いと思ひますなら、幼少の時より習癖を馴致て置かなければなりません。

婦人は歩きながら双腕をダラリと下げて居る筈では御座いません、帶の上

の方に折つて置く筈で御座います、手持不沙汰でいけませぬならば、傘とか、腕貫とかを持ちまして恰好よくするやうに致さなければなりません。

訪問に參りますときは、歩み方を平に致し、餘り早くもなく、又餘り遲くもなく、飛んで歩くもいけません、足を引ずつて行くのもいけません、靴の踵を鳴らします風は特更宜しう御座いません。

敎育ある高貴の婦人は外出致しますとき、輕き連歩を移して地に障るか障らぬやうに歩いて參ります、客室に入りますときには靜に滑りますやうに歩を移して參ります。

(十九)紹介の方法

巴里では紹介に就きましては英國のやうにそんなに八釜敷く致しません、

是は寧ろ他國から這入つて參つた風と申しても宜しいので御座います、巴里では友達の家に人が居りますれば紹介が御座いませんでも、信ずるに足る者と致して自由に話を致します。

舞踏會などで來客が大勢御座いますれば、迚も來客の方を一々紹介致す譯には參りません、軍人などは自分と一緒に舞踏致し度いと思ふ所の令嬢又は令嬢のお伴をして參りました人に紹介して貰ひますときは、家の主人に願ひまして紹介の勞を取つて貰ひます。

紹介致します人は先づ第一に名乘りますのが禮で御座います、此の紹介法は僅少の言葉で行はれますので、例へて申しますれば、何某を婦人に紹介致しますときには「私は何某さんを貴女に御紹介致す榮を有ちます」と云ひます

れば尙鄭寧で御座いますけれども、單に「私は何某さんを貴女に御紹介致します」と申しましても宜しう御座います。

婦人を男子に紹介致しません、老人を青年に紹介致しません、却て其の反對を取りまして紹介致す筈で御座います。

若き婦人は誰か男子を紹介致されましたとき頭を傾けさへすれば可う御座います。

若き婦人は友達に自分の兄弟や從兄弟を紹介致すことが出來ます、其時には「私の兄弟何某を御紹介致します」又は「私の從兄弟何某を御紹介致しますと申しさへすれば宜しう御座います。

(二十)訪問者の身裝

訪問の性質に依りまして、婦人の身裝に多少の相違が御座います。此の相違は善く注意致して置かねばなりません。

儀式の訪問には流行社會の身裝をして、規則正しく化粧つて參らなければなりません、絹若くは羅紗の上衣に美しき帽子と手袋、夏は裝飾の附いて居る傘、冬は着物に釣合つて居るところの腕貫などを用意致す筈で御座います。

婚姻式の訪問にも之と同じ身裝で御座いますけれども、もう少し美しいのを着用致す筈で御座います、弔慰の訪問は前にも記しました通り餘り華美な色はいけません、黒色のが禮で御座います、又は濃い鼠色でも宜しう御座います、凡て自分勝手な好みはいけません帽子でも、手袋でも華美で御座い

ませんで、黒つぽいのを撰ぶ筈で御座います。

病氣見舞の訪問にも質素な上衣と質素な帽子とを被りまして、自分勝手の身裝を致しませぬやう氣を附けなければなりません、香のする花木を病人に持つて行つてはいけません。

翰林院加入式のときには、立派な身裝で參らなければなりませんけれども、頗る眞面目に致して規定の通りに致さねばなりません、薄白の帽子と白の手袋と扇とを持つ筈で御座います。

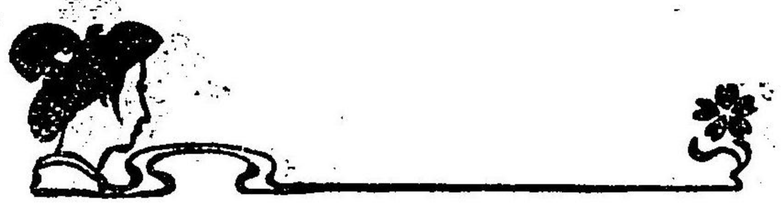
男子の訪問にはフロックコートに鼠色か空色のズボンを着用致します、ズボンの縞柄は細かなのでなければなりません、荒い縦縞や格子縞のやうな目立ち過ぎますものは品が好く御座いません。

（二十一）訪問者の出入法

遠慮深い訪問者に取りましては入りますときが出ますときよりも面倒が御座いません、何せと申ますれば、來訪者が控室に居りますとき、召使が客室の戸を開けますと云ふやう定まつてに居りますから默つて通りさへ致しますれば宜しう御座いますけれども、客室を退きますときには餘程好い折を見付けまして、自分の方からお暇を致しませうと立ちませんければならぬので御座います、常には新たに來訪者の御座いますのを好機と致して出て參ります。

（二十二）控室に脱ぎ置く着物

面會になりますと家僕若くは女中が控室に居りまして、來訪者の參りますや否や、直ぐに戸を開けまして、來訪者を待たせませぬやうに氣を附けて居り



ます。

常には控室の具附道具と申ますものはテーブル、椅子、長椅子、外套掛、釣洋燈などで御座います、特に大きな姿見も具附て御座います、是は婦人の來訪者が客室に入ります前に一寸姿を見まする爲に、誠に必要な道具で御座います。

氣の附きます家には控室の側に衣裳掛、若くは衣裳室と申すやうなものが御座いまして、來客の着物を召使が受取りまして、而してそれを其處に掛けて置きます、客の歸りますときは又召使が之を持つて行つて上げますやうになつて居ります。

雨の降る日に車に乘らずに訪問致す筈では御座いません、けれども若しも

さる日に訪問致しますることが御座いましたならば濡れた着物や長靴は悉く脱いで入りますやうに氣を附けねばなりません。

平生婦人は傘と外套とは脱いで客室へと這入りますが、薄絹の肩掛や、奇麗な短表衣などは離しません。

傘や腕貫は始終手に持つて居ります、どんな小さな包物をも客室に持つて這入りましてはいけない時で御座いましても、傘と腕貫とは持ちまして宜しいので御座います。

普通の訪問のときは男子は外套と傘とは控室に置いて這入りますけれども、ステッキは持ちながら又帽子は脱ぎまして手に持ちながら客室に這入ります。

けれども、宴會に招待されましたときには、男子はステッキと帽子は控室に置いて這入ります。

婦人が侍者を伴れて參りますとき、侍者は控室まで扈從て參りまして其處に主婦の毛裏の上着を守つて居りながら命を待つて居ります。

（二十三）特別訪問に就ての心得

高貴の人を訪問致しまするには前以て何日何時に訪問致してもよろしきかを伺はねばなりません。

何日何時に面會致しますと云ふ承諾を得ましたならば、指定の時間に遲れませぬやうに出掛けて參らねばなりません。

『おかけ遊ばせ』と云ふ言葉の出ません内は自分勝手に腰を掛ける筈では

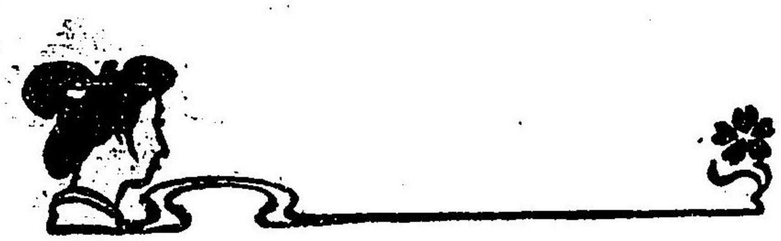
御座いません。

獨身男子の家には、婦人が訪問致しませぬのが規則で御座いますけれども、親戚で御座いますとか、最早年を取つて居りますとか、又は病氣などの時に夫婦一緒に參りますやうな場合には此限りでは御座いません。

若き婦人は用事が御座いましても、成るべく一人居ります男子の家を訪問致す筈では御座いません、是非訪問致さねばならぬ場合には年を取りました婦人とか又は家族の者と一緒に參る筈で御座います。

醫者のところに參りますにも同じことで御座います、若き婦人は母とか姉とか、又は自分よりも年長の友達と共に參る筈で御座います。

若き男子の方からも妙齡女子のある家庭に訪問致しますときには餘程注意



を致さねばなりません、餘り繁々と其家に出入しませぬやうに致さねばなりません、如何にも婚姻でも致したさに訪問すると思はれますといけません、實際さる考が御座いませんければ尚更のことで御座います。

（二十四）普通訪問及接客に就ての心得

巴里では普通の訪問は常に三時から六時までの間に致します、朝飯と夕飯の早い地方で御座いますと二時から五時までの間に致します。

普通の應接のときは主婦はそんなに立派な著物を着ません、來客を耻めますやう思はれてはいけませんが、面會日には手袋を篏めて居ります。

前にも述べました通り貴婦人などはチャンと面會日が定まつて居りますから、貴婦人と思はれたければ其日に訪問致さねばなりません、けれども友達

同志が往來致しますときは、別に日が定まつて居りません、お互に參り度い時に參り、今日行つて留守で御座いますれば又明日出掛けて參ります。

兩方の面會の衝突ますときには、お互に會ひます日を定めまして面會致します。

面會日には何んなことが御座いましても、婦人は外出致す筈では御座いません、定まつて居ります日以外に此方から訪問致しますのも變で御座います、若し病氣で御座いますれば誰にも面會致さぬことに斷然斷る筈で御座います、或人には面會致し、或人には面會致さぬなどのことがありましてはいけません。

但し男子はそんなに几帳面に日を定めて置きません、用事の都合によりま

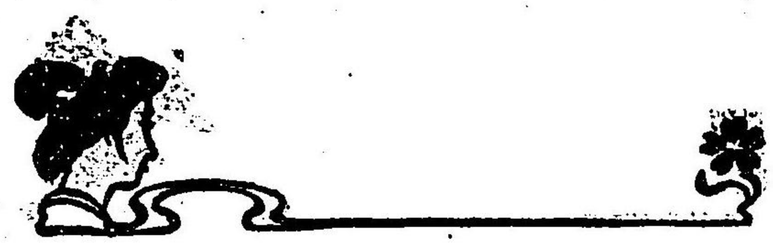
して何時外出致しますか分りませんから、訪問致しましたのに家に居りませんでも、左程深くは咎められません。

概して申ますれば男子は容易に面會日を定めません、用事が御座いますれば何時でも又何處でも人に面會致します、用事向のことに就きましては多くは朝事務室で面會致します。

面會日には祝日のやうに客室を裝飾致しまして賑はしく且愉快に致して置かねばなりません、花木を取換へ、光明を好い具合に差入れまして、夏は新鮮の空氣を通はせて涼味を保たせ、冬は室内を適度に溫めまして暖氣を帶ばしめ、何人の健康にも障りませぬやうに準備致して置かなければなりません。

冬は不時の用にいつも一ッの室を温めまして、何時客が來訪致しましても直ぐに其室にて應接が出來ますやうに致して置ねばなりません、其室には食堂でも關ひません、來客を直ぐに冷たい室に入れて、客が參りまして後に火を焚きますことは餘り失禮で御座います、暖氣が客の歸られました後やうや う室を溫めますやうでは何の役にも立ちません。

主婦が客に接しますときには煖爐の右の方の長椅子又は肱掛椅子に腰を掛ける筈で御座います、前にも申ました通り煖爐の近くは貴い座と定まつて居ります、若し良人が客室に居りますれば煖爐の左の方にあります肱掛椅子に腰を掛けて居ります、夫婦は高貴の婦人とか、若くは顯官、高僧でも參りませんければ決して座を讓りません。



家の主人が客に應接致しますときには、婦人の客が入つて參られましたとき、立つて其座まで案内を致して參りますが、男子の客で御座いますれば別に動きは致しません。

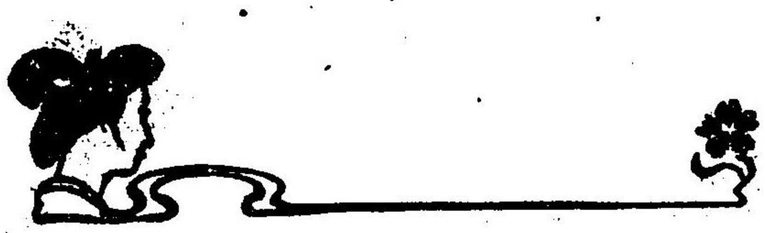
婦人の客が座を立つて歸りますときには、主人も立ちまして控室の戸まで送つて參ります、男子の客で御座いますれば、老人とか又は顯官高僧で御座いませんければ、左樣には致しません、老人と顯官と高僧の三人は訪問致しますとき、何時でも婦人と同じ敬禮を受けますものと定められて居ります。

主婦は婦人客の這入つて參りますときで御座いませんければ、座を立ちません、男子には鄭寧に挨拶致しましてから、手で各自に坐するところの椅子を指示します丈で御座います。

午後五時頃は一番訪問の客が多う御座いますから、主婦は手輕な夕飯とお茶やお菓子や美酒などを進めます、是は英國から這入つて參りました風で御座いまして「五時の茶」と申しますが名前までも其儘採用致して居ります。

客に應接致して居ります間は何んな仕事でも致してはいけません、極親しい友達の前で御座いませんければ仕事は致しません、親しい友達は午後自分も仕事を持つて遊びに參りますとが御座いますから其時は別で御座います。

家庭教師で御座いますときは、手を動かして居りましても差支御座いません、客の出入にも座を立ちませんけれども、主婦が少し不快で自分は其の手助を致しますときは違ひます、斯う云ふ場合には全く主婦のやうに行ひまして、而して主婦の疲勞を省きますやうに致します。



娘は母が病氣のとき、家庭教師又は親戚の人に助けられまして、母の代りに客に應接致すことも御座います。

客の居ります前では決して手紙を開封致しません、手紙を手に受取りましても急いで讀みたさうな風を致してはいけません、如何にも來客に早くお歸り下さいと申すやうに見えますから、氣の利いた客は直ぐにそれと察しまして、頓てお暇を致して歸ります。

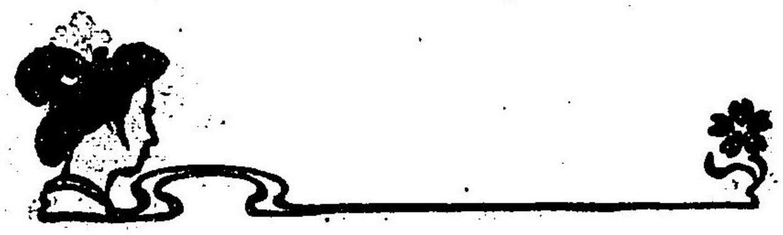
訪問の時は先方を煩はしませぬやうに始終氣を附けまして、先方に來客が御座いますとか、忙はしさうでありますとか、又は外出しかゝつて居りますとかのときは、直ぐに歸りますやうに致さねばなりません。

訪問者が大勢客室の入口に居りますときには、婦人客が先づ年齢の順序に

従ひまして這入ります、次に男子も年齢の順序に従つて這入りますのが規則で御座います、客室に這入りましてから、主婦も同じ順序に依りまして之を取扱ひ、各自に就きます座を指定致します、肱掛椅子は婦人に、たゝの椅子は男子に出しますのが規定で御座います。

訪問者は相互に特別の話を致してはいけません、又家の道具や來客の化粧などをヂロ〳〵見てはいけません。

面會日で御座いますれば主婦は必ず在宅と定まつて居りますから奥様は御在宅で御座いますかと尋ねます必要は御座いません、けれども他の日に訪問致しますならば奥様又は旦那様は御在宅で御座いますかと尋ねる筈で御座います。



訪問致しますとき車で參りましたならば毛皮の外套や洋傘などは殘らず車の内に殘して入るので御座います。

男子は日中用事で忙しう御座いますから、夜分でも訪問が出來ますけれども、婦人は特別の招待が御座いませんければ出て行きません。

大勢集まつて居ります所の客室に入りますとき、誰よりも先きに主婦に挨拶を致し、次に識つて居ります客に一々挨拶致します、又歸りますときには之れと同じ順に從ひまして、先づ第一主婦にお暇を告げ、次に今迄話を致した來客に挨拶を致し、尚自分に挨拶致す男子客の前には少し頭を低げて出て參ります。

親戚とか又は親友とかで御座いませんければ、祝祭日と日曜日には決して

訪問致しません。

第二章　巴里婦人の談話振

(一)談話の際に於ける身振及擧動

交際上一番大切で御座いまして、又一番六ヶ敷いものは談話で御座います、談話を仕向けますにも又談話を聽きますにも、夫々規則が御座います。

先づ談話を仕向けます人は、成るべく言葉數尠く、特に身振や擧動の安寳を致しませぬやうに慎まねばなりません、談話が世間一般の事、文藝上の事又は日常の出來事に亘つて居ります間は、是非其の通りに致さなければなりません、來客には各々に容易く口を開かれる機會を與へまして、人が話を致

して居ります間に横から啄を容れません、啄を容れるときで御座いましても他人の話に興味を添へますやうな話を語る筈で御座います、さう致しますれば人の話の妨となりませんで、却て之を助け、人の話に花を咲かせますやうになります。

主婦は巧妙なる外交家の態度を學びまして、政治や宗教などの問題に亘ります事柄は一切省きますやうに心掛けて居らなければなりません、主婦はいつも客と客との中間に立ちまして談話が少しでも議論に亘りさうになりましたならば直に其の樣な語氣を和げさせますやう勞を執り、危い道に入りかゝると思ひましたならば、又直ぐに其の話を途切りまして、他の話に轉じさせるやうに致し、終りまで談笑して樂しく過されますやうに綾を取つて行かね

ばなりません、丁度外交家と同じ役目を帶びて居りますので御座います。

身振と擧動とは思念の電話のやうなもので御座いまして、言葉の手傳を致しますから、之に就きましては特に愼重の態度を取りますやうに注意致さねばなりません、言葉の綾を取り、親切を表はすやうな場合にのみ之を示す筈で御座います、例へて申しますれば椅子を指しまして、何卒お掛け下さいと勸めますとき、又は人を示しまして、此方は誰某で御座いますと、紹介を致します場合に致すので御座います、言葉は明瞭に言出す筈で御座いますけれども餘り高調子で話しますと、人に五月蠅く思はれますからいけませんけれども、言葉を一句々々づゝ切りまして聽取り易いやうに聲を強めますのは毫しも差支御座いません、餘り早言葉もいけませんが、餘り野呂過ぎますの

もいけません、總て言出方を判然致して居りますのが宜しう御座います。

右は話を致します人の方で注意致さねばならぬ點で御座いますが、話を聽きます人の方では尙一層注意致さねばならぬ點が御座います、希臘の古き諺に「言葉は白銀なれど、沈默は黃金なり」と御座いますのは默つて聽いて居りますことが最も大切であると云ふことを示された金言で御座います、若しも單だ默つて居りますばかりで用が辨じますれば、それほど易しい事は御座いませんけれども、默つて聽いて居りますことは中々六箇敷う御座います。

人の話を聽いて居りまするには、最初から就いて居りました椅子にチャンと腰を掛けまして、麗はしき姿勢を保ち、後の方に反返ませず、さりとて又餘り前の方にも屈みませず、手で物を弄りませず、堅苦しさうな樣子を示さ

ず、窮屈な風を見せず、話を致す人に視線を向けましても、人を見詰めませず、側などを見て放心の有様を示さず、天井を眺めて飽きた様子を見せませず、さりとて下ばかりを視て敗物の模様などを見詰めて居りますやうな風を示しませずと云ふので御座いますから、人の話を聴く方法と申しますものは實に六箇敷う御座います。

足を交叉致しましたり、又は足を足の上に載せたり致しますのは失禮で御座います、杖又は洋傘などで室内の物品を指したり致しますのも、失敬な風で御座います、されど双手をチャンと膝の上に乗せて置きまして畏つて居りまして窮屈さうに見えましては交際社會に通りません。

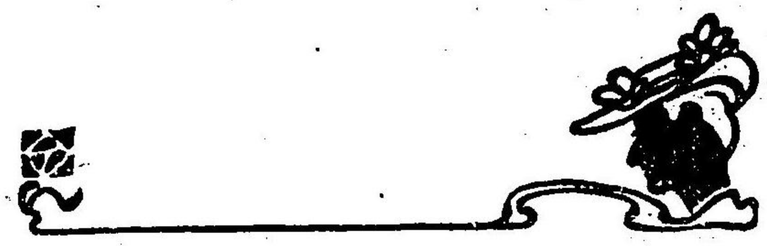
訪問の時に於きます談話にも中々手際が要ります、訪問者が大勢居ります

れば側に居ります客と話を致しましても差支御座いませんけれども、聲を高く致しまして、他の人々の邪魔になりますやうではいけません、けれど又餘り聲を低く致しまして如何にも客の惡口を申て居りますやうに思はれてもいけませんから、餘程加減物で御座います。

餘り形式的に敬語ばかりを遣ひますのも煩はしう御座いますが、餘り不躾な言葉遣を致しますのも失敬で御座います、交際場裡には虚禮も無禮も共にいけません。

(二)談話を仕向ける方法

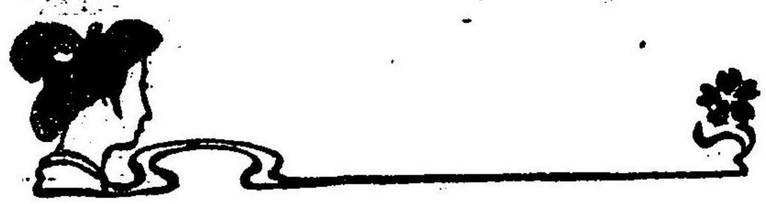
談話を仕向けます方法は、主婦に取りまして、最も大切な務で御座います。大勢の客に接しますときは、親切は申すまでもなく、誰に對しましても愛



嬌を振蒔いて居らねばなりません。

話す方法も知らなければなりませず、話させる方法も知らなければなりませず、又聽く方法をも心得て居らねばなりません、主婦の役目は自分を目立たせませぬやう致しまして、一座の客のみを目立つやうに致さねばならぬので御座います。

主婦は自分の頓才を示すやうな話を致します場合は誠に稀で御座います、多くは客室の端から端まで愉快を通しまして各自が隨意に面白く話をして樂まれますやうに取計ひますれば可いので御座います、で話は彼方へ飛びましたり、此方へ飛びましたり、宛然蛺蝶が翩々として花間を飛び歩きますやうに致し餘り一つの事柄にのみ拘泥致しませず、文學だの音樂だの種々の話に



飛び移りまして、それもほんの淡泊と、微風の波上を過ぎますやうな風に致さなければなりません、近頃の出來事なども話致しても宜しう御座いますが、冗談半分に人の惡口などを申しませぬやう注意致さねばなりません、此頃恁んな事が流行りますが、是は今日の客室の弊で御座います。

されば主婦は始終耳を傾けて客の話を聽いて居りまして、聊かでも不遠慮の話が出ましたならば直ぐにそれを他に轉じさせますやうに氣を利かせなければなりません。

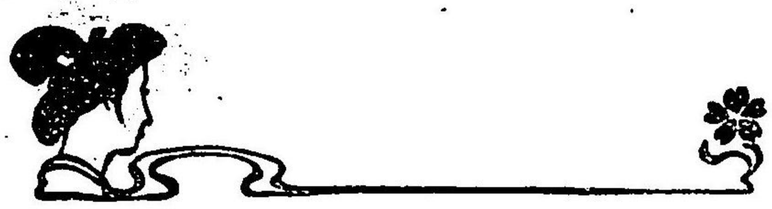
話最中に之を途切りますのは中々六箇敷う御座いますけれども、そこは上手に取計らひまして、話を全然切つて了ませず、其間に一言を狹みまして、話頭を他に轉ずるやうに致しますれば可う御座います。

一體人の話を途中で切りますことは無作法な話で御座いますが、でも讒言惡口などを談話の裡に加味して置きますよりは宜しう御座います。

主婦は又二人の客の間に議論が起りまして、爭にでもなりますやうに思はれましたならば、直ぐに其中に入りまして、口を出して、其の議論を横道に導きまして一般の話に移りますやうに取計らはねばなりません。

それにも係りませず、時々は隨分失禮な皮肉な話が出ますことが御座いますが、其時には冷靜な顔付を致しまして默つて居りながら不贊成の意を示す筈で御座います。

主婦の來客に對する役目を能く心得て居ります婦人は、來客の中には屹度遠慮致して居られます婦人があると思ひまして、其の婦人を認めますや否や



直ぐに其の方の側に參り、此方より色々と話を仕向けまして、何うしても話を致さねばならぬやうに致します、時としては遠慮致しまして控へ勝で居られます婦人に話をさせてあげまするには、一寸一瞥致すばかりで足りることも御座いますが、是は主婦の手際にありますことで御座います。

言葉尠でありますとて、人の良否を定める筈では御座いません、得意の問題に就きまして話を致させますやうに勸めますときには、饒舌で驚きますことが御座います、話を致す機會が御座いませんので無口と見えましたので御座いますから、機會を作つてあげますやうに致しますれば可う御座いますけども性來無口の質の方も御座いますから、其時には話が途切れませぬやうに餘程上手に調子を取つて參らねばなりません。

主婦は又凡ての訪問者を悦ばせますやうに、殆ど萬に通じて居らなければなりません巴里の客室には文士もありますれば、音樂家もあり、又學者なども御座いますから、主婦は文士に接しましては文壇の近作に就て語ります、音樂家に接しましては何か音樂上の話を持出し、學者に對しましては學術上の發明發見などの事を話致しますことの出來る位の知識を備へて居らなければなりません、斯う萬藝に通じて居りますやうな知識を得まするには、是非文學、音樂、科學などを專修致すには及びません、固より客室で談話に上ります位のことは普通一般の事で御座いますから、日々、新聞、雜誌などを讀みますとき、能く注意致して讀んで居りますれば專門の先生方と話を致して充分悦ばせます丈のことが出來ます。

(三)談話上の禮節

言葉遣の鄭寧、親切で御座いますのと、言語擧動の雅びやかでありますのとに依りまして、談話上の禮節と申すものが出ますので御座います。

上品なる婦人は言葉遣ひが鄭寧で、親切で、いつも愛嬌が御座いますから人に敬慕致されます。斯樣な婦人は人の善は揭げて語ますが、決して其の惡を申しません、他人が自分の前で人の惡を話すことが御座いますれば直ぐにそれを辯護致します。

辯護致しますにも別段爭ひまして彼れ此れ申す譯では御座いません、唯聽き苦しいことは聽きたくは御座いませんと云ふ風を示す丈で御座います、若し又非難が實際に當つて居りますれば、巧に話を他に轉じさせますやうに務め

ます。

談話上守らなければなりませぬ一般の規則は、誰の機嫌をも害はず、誰の氣をも反さぬやうに務めますことで御座います、人の氣持を悪く致しますやうな言葉の出掛けますのを止めますのは易しい事で御座います。

鄭寧に客の家族の消息を伺ひまして悦びますやうな風を見せますのは結構で御座います。けれども餘り子供などの健康を穿るやうに問きましたり、五月蠅くなりますまで家政上の細かな事まで聞糺したり致しますのはいけません。

若し二人の話が一緒に衝突ましたならば、年の若き方が直ぐに言葉を控へなければなりません、若又年長の方が中々話が上手で本統に面白う御座い

ますれば一同は默つて之を聽きまして、訪問の間一言も話しませんでも、唯面白く聽いて居りますやうな風を見せて居りますのが、趣味のないことを無暗に喋りますよりも、却て鄭寧で御座います。

實際間違つて居ります事を飽迄も言張つて居りましても、公然と正面より之に反對を唱へます筈では御座いません、直ぐに談話を止めて了ひますか、左もなくば斯う申すので御座います、「それは貴女本統で御座いませうか」「お聞き違ひでは御座いませんか」私の聞きましたのは少し違ひますが云々、」是は一寸した申方では御座いますが大層鄭寧になります。

此の鄭寧な話振りは別に學んで出來ますことでは御座いませんが、親切な心から自然に出て參りますので御座います。

人は禮を缺きますよりも心を缺いて居りますのを惡く思ふもので御座います、談話には親切なる心が一番大切で御座います。

婦人と申すものは自然に言語の溫雅なるもので御座いまして、言葉遣が優しくて、言出方が優婉で、音聲も美しく調子も和いで居りますから、婦人の談話は何となく人を魅する所が御座います、況してや少しでも教育を受けましたならば、談話に於きましては確かに男子に優つて居ります、で主婦が多少教育が御座いまして、文藝上の話が出來、世間の風俗と禮式などを能く心得て居りますときには其を聞きますのは實に嬉しう御座います。

(四)談話の問題

主人と主婦との手際は格別談話の問題を撰ぶところに現はれます、主人及

主婦が一たび話の端緒を啓きますれば、客の方では欣んで之を聽きまして、容易に答を致すことが出來ます、其譯は時々主客が餘り能く識り合つて居りませんとき、お互に氣を反らしてはならぬと思ひまして、餘計な遠慮を致し何から話を致して宜しいのでありますか分りませぬことが御座います。

愉快な談話を致しまして、誰にも興味を以て聽かせますやうに致しますには、多くは世間一般に渉るやうに致しまして、專門の事は成るべく避けますやうに務めなければなりません、談話の間に專門の話が出ましては、一般の人には解りません、解りましても餘り興味を感じません、で專門家の會合とか特別に招待致されました人々の間で御座いませんければ、專門の六箇敷い話は持出しませぬ方が宜しう御座います。

政治問題と宗教問題は一番議論の種子となりまして人の氣に障り易い問題で御座いますから談話には成るべく之を避る筈で御座います。

(五)談話の要訣

日常談話に上ります所のものを一々眞面目に調べましたならば、語る勇氣も御座いません、聴く辛抱も御座いませんやうになりませう、平生人々の話し合ふところの事柄は大抵お定まりの文句で御座いまして毫しも變化が御座いません。形式的や虚禮的の言辭が多う御座いまして、殆ど無意義と申しましても差支御座いません、けれどもそこが社交で御座いまして人間は社交的動物として社會に生息て居ります以上は、寒暖の挨拶も必要で御座いますれば、形式的辭禮も必要、又無意義の談話も必要でありますれば、兒戯に類して居ります話も必要で御座います、お世辭も云はねばなりませず、愛嬌も振

蒔かなければなりません。

それ故談話中に無意義の言葉が御座いましても、決して空しい言語と看做す筈では御座いません、「お寒う御座います」と申しますのに「イエ寒くは御座いません」と申し「お目出度う御座います」と申しますのに「イエお目出度いことは御座いません」と申しましたところで、何の役にも立ちません、定り切つた言葉と申しましても、定り切つた言葉を以て答へませんければ應答が悪いばかりでなく人の氣持を損じて了ひます。

されば談話と申すものは如何なるもので御座いましても社交上必要で缺くことの出來ぬものと看做さなければなりません、けれども談話上守らなけれ

ばなりませぬことゝ避けなければなりませぬことゝが御座いますから、交際場裡に立つて居ります人々はそれを能く心得て居らねばなりません。

先づ談話の際に避けなければなりませぬことは、自分の語りませうとする所のことばかりを話して、人の話には耳を傾けずに居り、甚しいのは人の語る機會さへも與へません、殆ど自分一人で談話を致すやうになりますが、是は實に厭なもので御座います。

語ることも必要に相違御座いませんが、聽きますことも亦必要で御座います。間々無用な又無益な言葉が御座いましても、忍んで聽いて居らねばなりません、談話に於きまして微頭徹尾有益の言葉ばかりを云ふと申すことは實際に不可能事で御座います。

自分の意見と嗜好に反する言葉を聞きましても席上では別に議論を致す所でも御座いませんから、出來る丈け之を聽いて居る風を示しまして賛成の出來ますだけは賛成を致してあげます筈で御座います。

人の氣に合ひます談話を致し度いと思ひますれば、其人の愛します所、其人の好みます所のことを語るやうに心掛けて置く筈で御座います。

一片の談話でありますから、何うでも可いと思つてはいけません、談話中にも鄭寧親切に致して多少愼重の態度を取つて居らねばなりません。

對話致す人の氣象と性質とを見ました上で話をすることも大切で御座いますが、格別其の知識の程度に應じまして話を致すことが尙一層必要で御座います。

談話の際には傲慢自負の態度を慎みまして、務めて自分の才を誇りますやうなことの御座いませんやうに氣を附けねばなりません、話の中に絶えず、「私が」「私が」などの言葉の出まするのは、實に耳障りのもので御座います。人の利害を見計つて話を致しますことも必要で御座います、漫りに自分の利益になるやうな利己の話ばかりを持出しましては一回の談話で直ぐに人に厭がられて了ひます。

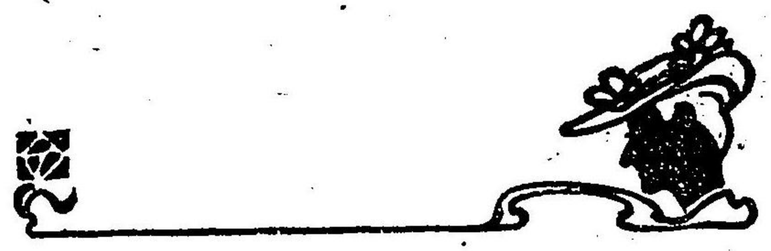
他人の話を尊重して、自分の方より話を致しますときには、成るべく謙遜に出なければなりません、「御無理御尤と、申すことも出來ませんが、逆つても益がないと見ましたならば、逆ひませぬ方が利口の遣方で御座います。自分の權利を示しましたり、學才を誇りましたり、又は自分の家柄若くは

身代などを鼻に掛けますのも、宜しく御座いません、總じて自慢話は談話上禁物と看做さねばなりません。

長談を致し、贅語を云ひ、始終同じことばかりを繰返しましても、人に倦きを來たさしめますから其邊も慎まねばなりません。

客の居ります所を顧みて話を致すことも大切で御座います、話をして宜しい所と悪い所とが御座います。

談話の要訣を一言で申しますれば、聽くことを多く致して語ることを少く致し、人を目立つやうに致しまして却て自分を目立たしめませぬやうに務むると云ふ點で御座います。



第四章　巴里婦人の宴會振

(一)宴會の招待

宴會の招待狀は多くは八日乃至十日前から通じて置きます、招待は口で傳へますことも御座いますし、又招待狀として出しますことも御座います。

招待狀と致して差出します方が禮式に適つて居ります、而して招待を受けました人は出席しまするかしませぬかを遲くも二日前までに回答致さなければなりません、出席致しませんときには如何にも殘念で御座いますと云ふ風を示し、出席の出來兼ます相當の理由を書き認めまして遣ります方が鄭寧で御座います、けれども出席致しませんからとて、後に返禮に參らなくも可いと

云ふ譯では御座いません、矢張り一週間後に返禮の訪問に出掛けて參らねばなりません。

招待を受けましたとき斷る積りで居りながら宴會日の間際まで之を延引致してはいけません、招待する方で夫々準備が御座いますから、折角當に致して居りましたのに急に斷られます場合には空席の埋合を致さなければなりませんやうな事も生じまして、頗る迷惑で御座います。

招待狀を出しまして後、急に宴會を延ばしますやうになりましたならば、凡ての被招待者に宴會延期の旨を記しました名刺を廻はさねばなりません、けれども延期の事が急に宴會の間際に出來致しましたならば、電話若くは電信を發しなければなりません。

若又主人か主婦が病氣などの爲に差支が起りましたならば、其の病が傳染病で御座いません限りは、招待致されました人々が參られますやうに致して置く筈で御座います、主人が病氣のときには主婦が一人で接待を勤めますが主婦の方が病氣で妨げられますれば、主人は親戚か親友の中から主婦の役を勤めますに最も適當な婦人を立てなければなりません。

出來る丈金曜日の宴會の招待を避けなければなりません、金曜日は宗教上の規則によりまして肉食が禁じられて居りますから、けれども止むを得ず是非金曜日に宴會を開かなければなりませぬ場合には、出來る丈け肉のない料理と肉のある料理とを匹敵しまする位に備付けなければなりません、又肉のあるスープと肉のないスープとを二通り出さなければなりません。

招待客の中に重要の人物をも加へませうと思ひますれば、唯だ招待狀を發するばかりでは足りません、尙自身が出掛けて參りまして招待致さなければなりません。

迷信では御座いますが、西洋では十三人の數を嫌ひますから、十三人の客を招待致すことは避ける筈で御座います。

時として、招待致し度く御座いません人の前で、其の親類の方を招待致しました事を話さなければならぬ場合が御座います、其時は一寸都合が惡う御座いますけれども、食堂の狹隘なるが爲とか、氣の合ひません人々を招待致しました爲とかの口實を以て良いやうに言譯をする筈で御座いますが、何時かは其人をも招待致さなければなりません、宴會に差支が御座いますれば、

少くも夜會にても招待する筈で御座います。

此場合の身裝は宴會に列りますときに同じもので御座います。

出來るだけ男女の客を同數位に招待致す筈で御座います、けれども八釜敷く申せば婦人客よりも男子客の數の多いのが宜しう御座います、何せと申しますれば一人でも婦人を獨り食堂から客室に通らせましては氣の毒で御座いますから。

席に列しますときには男子客でも婦人客でも、氣が合つて心安くなりさうな方を一緒に列せしめますやうに主婦は取計ひますので御座います、さう致しますれば談話がお互の間に面白くなつて參りますから。

仲の惡い人を和解させますと云ふ言譯で以て招待致してはいけません、若

し此事を豫め能く聞糺しませんと二人の間柄を却て今迄よりも惡く致す憂が御座います。

舊教の教師と新教の牧師とを一緒に招待致すこともいけません、舊教と新教とに限りませず、凡て宗旨の違つて居ります坊さん方を同時に招待致す筈では御座いません。

此等は些細なやうで御座いますけれども、禮法上餘程注意して心得て居りませんと、飛んだ事になります。

若し貧乏の身でありながら、身分の優れて居ります人の招待を受けましたならば、其の返禮に身分の良い人をも招待致さなければならぬと云ふ義務は御座いません。

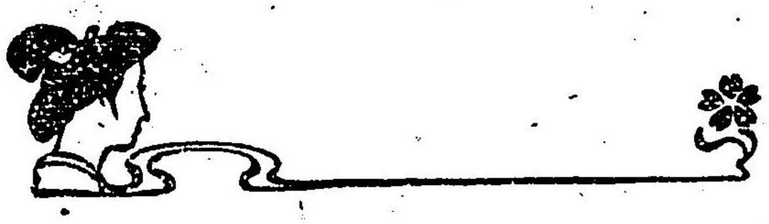
常に招待は婦人から婦人に傳へますのが規則で御座います、良人は殆ど招待致されました客のやうな有様で御座います。

けれども親しい間柄では良人は妻の名義を以て招待致しますことが御座います。

寡婦が未だ年が若う御座いまして普通交際を致して居ります人以外に招待狀を出しますときには、自分の親戚とか、若くは死んだ良人の親類の中から誰か嚴正した男を自分の前に立てますやうに致す筈で御座います。

時として「男子の宴會」とて、良人の友達(男子)ばかりを招待致しますことが御座います。

獨身者は自分の家の御馳走に夫婦者を招待致すことが出來ますけれども、



招待狀の中に親戚の婦人が接待役を助けますと云ふことを一寸通知する筈で御座います、宴會には此の婦人が主婦の代りとなりますので御座いますから萬事主婦として、取扱はれる筈で御座います。

(二)食堂の禮式

食堂を立派に裝飾り、光明が四方に輝き、花木が卓上に挿飾られ、山海の珍味を調理へまして、窈窕たる淑女が團欒して食卓に就て居る有様を見ますほど美しいことは御座いません。

けれども外觀ばかり美しくありましても、精神が麗はしく御座いませんければなりません、來客が皆仲の善い人ばかりで、一黨が溫かな心を以て和氣靄然として歡びを盡すやうでなければなりません。

丁度同分子を集めまして完美なる合調を作るやうなもので御座いますから接待役の主婦の手際で全き成功が擧げられるもので御座います、で食堂の外交も餘程六箇敷う御座います。

主人夫婦の身裝は招待されました來賓と同じで御座います、婦人は胸の上部を開けて、頸と肩とを露出すので御座いません。

婦人の下裳は流行を逐ひまして、宴會服の規則に從ひ、觀劇服よりも些と質素に致さねばなりませんけれども、宴會服はお互に近く、且長く視合つて居りますから、人々の批評に堪ますやうな品質でなければなりません、さりとて寶玉を附けまして舞踏會に臨む時のやうに飾らずとも宜しう御座います

男子は黑の上着と黑のズボン、に黑か白のチョッキを着、白の襟飾を附けます、手袋は白若くは蠣引きのもの、靴はゴム靴を穿きます、斯樣な身裝で宴會に列ります。

主婦も立派な身裝を致しましても、餘り華美な扮飾を愼む筈で御座います來賓の婦人を盛裝美服で壓するやうではいけません。

青年男女は申すまでも御座いませんが、此の儀式的宴會に列席致さぬ筈で御座います。

主婦は宴會が始まります少し前に、言葉巧に來賓をお互に識らせますやうに致しますれば洵に結構で御座います、紹介致しますときに、銘々の名前に多少其の職務と境遇及び身分などを示し形容語を加へます筈で御座います

此頃は自由の世の中で御座いまして、人々が各々其意見と信仰を異にして

居りますから、何某は何某と宗旨が違つて居りますがなどゝの言葉を出しましても無用では御座いません、初から斯う知らせて置きますれば、宴會に面白くない言葉の出ますのを豫め防ぐことが出來ます。

けれども概して申ますれば、同じ食堂に招待致しますときには成るべく思想と意見との同じ來賓を集めますやうに致まして衝突が御座いませんやうに務める筈で御座います。

食事の時刻が參りますれば、召使が食堂の扉を兩方に開けまして「奥様、出來まして御座います」と申します、若し奥様が有爵夫人で御座いますれば、奥様の言葉の次に「伯爵」とか「侯爵」とかを附け添へて呼ばなければなりません。

頓て主婦は座を立ちまして、自分の右即ち上席に坐すべき賓客の腕を取ります、他の一方では主人が一番貴い婦人に腕を出して而して徐々と食堂に向つて參ります、道を開けまして案内致しますのは主人で御座います、主婦は一番後に入ります、客室から食堂に入ります禮として男子の方は婦人に左の腕を出す筈のもので御座います。

けれども若し來賓が皆男で御座いまして、婦人は主婦一人のみでありますときには、食堂に入りますときの先導は主婦で御座います、主人は一番後から入ります、若し來賓中に僧侶が居りますれば、主婦は坊さんに腕を出します、けれども僧侶は多く腕を出しませんから、其の側に沿ふて歩いて參ります。

大僧正か僧正が來賓中に居りますれば、無論一同の上席を占めて居ります。けれども僧侶でありまして家庭教師となつて居りますものは此の規則に依りません、假令法衣を着て居りましても殆ど家族の者のやうに看做されて居りますから、主婦の右の席を讓ります、若又宴會が誰かの祝ひの爲に開かれましたならば、其人が上席を占めて主人が主婦の右に坐ります筈で御座います、(平常右は左よりも貴いものと看做されて居ります。)

結局來賓を席に列ねますときには、始終年齢と位置とを考へなければなりません、但し既婚者は獨身者の上席を占めます。

海軍は陸軍の上で御座います、陸軍なれば騎兵と砲兵とは歩兵の上で御座います。

各宗派の牧師や僧侶が食卓に就きます場合には、其家の子供の教育されました宗教の人が他宗の人の上に座を占めます、若し子供のありません家で御座いますれば、妻の宗教が上席を占めますことになつて居ります。

尙宗教の加はつて居ります場合は、家の少女が初聖體を拜領致しました日(初めて晩餐式に列したる日)には、少女が當日の一番貴い人と看做されますから、上席に着きます筈で御座います。

食堂の禮式は家庭に於きましては中々六箇敷い問題で御座います、特に二人の姑が列席致ますときには尙更六箇敷くなります、主人の母が家に居りますときには、主婦の母と主人の右に坐らせまして、主人の父と主婦の右に坐らせますけれども、此の上席は主人の母も希望しますから、次の宴會の折に

は、矢張り二人の姑が居りますれば、今度は良人の母に上席を與へますやうに致します、凡て此のやうに毎度交代に致しますやうに取計ひます。

是は主婦に取つて記憶致すべき事で御座いますから、扣へに致して心得て置く筈で御座います。

若し寡婦が自分の子供達を招ぎますときに、總領が獨身で御座いますれば主人の席を占めます者は總領で御座いますから、其母に向つて坐りますけれども、時としては愛嬌の上から妹の良人に此席を譲りますことも御座います。

禮式に依りますれば二人の兄弟が共に結婚して居ますときには兄嫁は弟嫁の上席に坐ります、弟嫁の方が年を取つて居りましても、矢張上席を占めまして宜しう御座いますが、若し兄嫁自身の考で弟嫁に席を譲り度いと思

ひますれば譲つても宜しう御座います。

年長と申す名義は、他の凡ての場合にも上席を占めますものと指定致されて居りますけれども、婦人は之れに就き間違うことが御座いましても、多くは知らぬ振を致しまして八釜敷くは申しません。

男子客が主人の後に從ひながら、婦人客に腕を出しまして食堂に參ります前には、帽子を何かの道具の上に置きます。

(三)座席の指定

大宴會を開きますとき、主婦に取りまして重大な問題は食堂の座席を定めますことで御座います、是で時々非常に六箇敷くなります場合が御座います。

昔の禮式は左程に六箇敷く御座いません、男子が婦人に腕を出しますこと

は御座いませんでした、唯謹んで婦人の後に従つて参りました、婦人の方では自分の隣席に坐る客に相圖を致しますれば、それで事が濟みましたので御座います。

主婦は自分自ら來賓中の一番貴い人に自分の右の上席を指定致しましたが此風は今日までも繼續致して居ります。

來賓の座席を定めますとき正しく儀式に從ひますのは中々六箇敷う御座います。

此點に就きまして首尾好く濟しましたと思ふところの主人夫婦が御座いますれば、餘程上手なもので御座います、其譯は思はぬところで人の氣を損ねることが御座います、來賓の中には隨分と自分の地位、年齢などを鼻に掛けます人が御座います、又此點に就きまして隨分と氣に掛けます人も御座いますから、餘程面倒で御座います。

年長權を爭ひませぬのは、殆ど婦人の間に於きましてのみでありませう、男子では隨分八釜敷い人が御座います。

唯だ通人ばかりが、知らず識らず禮に缺けましたことが御座いましても、そんなに八釜敷くは申しません。

兎に角人を招待致す主人夫婦の方では出來ます丈け鄭寧に致す積であると思はねばなりません、で假令凡ての點に於きまして首尾好く行はれませんと致しましても、其の好意だけは酌みとらなければなりません、決して賓客の氣に障るやうな考が御座いませんのですから。

紹介は來賓が皆んな集りました上で致します、主人は男子客が腕を捧げまして食堂に同伴致すべき婦人を指定致しますが、此事は來賓が大勢のときには中々複雑して面倒で御座います、度々思違ひまして間違が生じ易う御座います。

小さな紙を作りまして、其上に一方には各婦人の名前を記し、他の方には食卓の圖案を指定致しましたる座席とを記し、面して此の紙を狀袋の内に入れまして、其上に婦人に隨伴致しますところの客の名前を記して置きます。

此の狀袋はお盆に載せて玄關に置きまして、召使が各來賓に渡します。

男子客が自分の同伴致すべき婦人を識りませんければ、主人に紹介して貰ひます、若し同伴致します婦人を識つて居りますならば、食堂に入ります時

刻以前に其の婦人の側に參りまして少しは話を致して居らなければなりません、婦人を識らずに居りますと宴會の時刻に其の婦人の近くに居りながら、之れを尋ね廻りましたり、又は婦人に長く待たせましたり致すやうでは不都合だと思はれますから。

時としては、主人が自ら凡ての狀袋をポッケットの中に入れて置きまして客が參られます度毎に、之れを渡しますことが御座いますけれども、是れにも少々不都合が御座います、何と申しますれば來賓の參ります順が分りませんから狀袋の順を一々定めて置きます譯にも參りませんので、來賓の名を見付兼ねますことが御座います、是れは實に體裁が惡う御座います。

されば初めより之れを玄關に置きまして來賓に渡させます方が却て都合が

宜しう御座います。

(四)宴會の献立

献立は思ふよりは六箇敷いもので御座います、來賓の人數や宴會の大小等によりまして夫々違は御座いますが、普通の宴會には成るたけ分量を少く致して、品の數を澤山出すやうに致さねばなりません。

けれども只今ではお料理の數を餘り澤山出します風が廢りましたが餘程の盛宴で御座いませんければ、普通の献立と申すものは大抵定まつて居ります即ちスープ一皿に、開食品一皿か二皿、之れは寧ろ一皿の方が多う御座います、時々は炙肉二皿、炙いものと冷たいものと二種を出します、けれども之れも炙いのを一皿位で濟して置きますことが出來ます、次に野菜一品、副食

品一品、砂糖煮二品、後食品と致しましては何か水菓子類のもので御座います。

主婦が料理人を使つて居りますときは、献立を致しますに何も六箇敷いことは御座いません、料理人が調理して持つて參りました所のものを調べさへ致しますれば宜しう御座います。

附添食品は卓上に澤山載せて置きます、又は召使が之れを客に取つて上げます、其時には幾つにも區劃のしてある水晶の器を手に持ちながら來客の人人に取らせます、其中には牛酪だの、鱈白魚、鰯魚の鹹鮭、小蕪青、蝦などを各々別々に入れて置きます、此等の薬味物を各々小さな器具の中に入れておきます水晶器を見ますると、何んとなく食慾が進んで參ります。

露西亞式の家には夕食に魚類の附添食品即ち牡蠣、鱈白魚抔を出しますが、之れをスープの前に廻します、而してスープが濟みまして後に普通の附添食品を出しますやうに致しますが、此風は餘り流行致しません。

朝餉には附添食品から始めます。

甜瓜はスープの後に出しますのが規則で御座いまして、之れには肉刺と銀の庖丁を附けて出します。

人に依りましては甜瓜に砂糖を附けまして、後食品として食べますのを好む者が御座います。

献立に依りましてスープを二品出しますときには肉汁器を食卓の上には出しません、召使が來賓にどちらのスープが宜しう御座いますと伺ひまして後

各自に好まれるところのものを差上ます。

來賓が食堂に入ります前にスープを出して置きますことは禮に反して居ります、斯う致しまするには特別の理由が御座いませんければ許されません。

献立表は各來賓の前に置きます食品の順序はスープが一番先き、次に開食品になりますが、開食品は附品を周圍に載せました牛肉で出來て居りまして炙肉とは違ひます、開食品の後に水菓子を出しまして、炙肉との間を切りますやうに致します、炙肉は家禽や鳥獸の肉を以つて作ります、其次にサラダと凝結汁など、野菜類は英國式に致して出します、サラダの次には砂糖物の副食品で御座いまして、其れから後食品になりますが始めは乾酪、次は果實生菓子などに移りますので御座います。

今日一般に流行つて居ります風は、食卓の裝飾になりますところの種々の糖菓を銀のお盆に載せまして出して置きます事で御座います。

主人は此のお盆を持つて食卓を廻つて歩きますから、之れが爲に後食品を供しまする手數は大層省かれます。

酒を出します順序は献立表には記してありますとも限りませんが、大抵左の順序に從つて出します、スープが濟みまして後、附添食品の間にはカープ酒、魚類の時には白葡萄酒、開食品の間にはボルドー又はブルコーギュ酒、副食品の出ます頃からはシャンパーギュ(シャンパン)と申すやうな順序で御座います。

後食品のときに香葡萄酒の類を進めますことも御座いますが、是れはほん

の味ひます丈けで御座います。

食事中にシャンパーギュを出して居ることも御座います。

美食法を重んじます家では那麼に酒類を取換へません、ボルドー酒か、ブルゴーギュ酒を出します、次にシャンパーギュを後食品のときに出します位に致して濟ませて置きます。

尙簡略に致しますれば、始から終りまで普通の赤葡萄酒を出します、炙肉のときには赤葡萄酒で品質の佳良なるものを出します、後食品のときにはダルナーシュ酒を用ゐますので御座います。

(五)食卓の敷布及食器

食堂に用ゐます器具の贅澤は近頃非常なもので御座います、殆と金銀寶玉

の展覽と申したやうな有樣で御座います。

けれども是等は多く流行によりまして變りやすいもので御座いますから、一々取立てゝ悉しくは云ひ盡されません、質素な食卓と申しましても隨分見事で御座います、鄭寧に敷布を布きまして、食器を體裁よく並べ、其間に草花を點綴しますれば頗る奇麗で御座います。

食器に就きましては多少規則が御座いまして、盛宴のときにも、普通の食事のときにも通じて行はれて居りますから、之れを記憶致して置かなければなりません。

先づ來賓は食卓に就きましたとき各々が充分の餘地を占めて居りませんときは、行動の自由が利かぬもので御座いますから、食卓は成るべく大きくて

食器が混雜せず順善く並べられますやうで御座いませんければなりません、各來賓が占めますところの食卓の廣さは凡そ一尺五六寸位と致して置きます

皿の右の方には庖丁と匙とを置きまして、左の方に肉刺を置きます。

口拭は二ッに折りまして皿の上に置きまして、其上に小さなパンを載せて置きます、口拭を色々珍らしく折りました風は現今は廢りました。

コップは三個か四個若くは五個も並べて置きまして一番大きいのは普通の葡萄酒を入れまして、水を混つて飲ますときの用に致します、二番目がブルゴーギュ酒を入れますときの用に致し、三番目がボルドー酒を入れます爲、四番目がシャンパーギュの爲と云ふやうに致して置きます、五個まで出しまして、五番目をシャンパーギュの爲に用ひますやうなときには、二番目の大

きなコップをマデール酒の爲に備へます、以下は前の順に依りて致します。

レン酒を進めますときには、マデール酒のコップを廢しまして其代りに青色のコップを用ゐます。

各來賓の間に銀製若くは水晶製の小さな鹽器を置きます、それに小さな匙を附けて置くので御座います。

酒壜は始終男子客の手近き所に置ねばなりません、其譯は男子が其側に居ります婦人客に酒を進めます役目を取りますからで御座います、一説には水を進めますことは失禮になると申ますけれども、之れは謬りの話で御座います、假りに婦人に水を進めて御覽遊ばせ決して斷りません、純酒ばかりを飲みますことは或種類の酒に限られて居ります、大抵は皆水を混れて飲ます

のが普通で御座います。

(六)膳立の禮法

現今では食膳の方法を大別して二ッに分けます、佛蘭西式の膳立と露西亞式の膳立で御座います。

佛蘭西式の膳立は殆ど廢れて居ります、餘りに金銀細工物を要しまして、食物の品質に害になりますから、今日では昔の銀器を藏めて居ります舊家にのみ行はれて居ります、けれども英國には佛蘭西式の膳立法が保存されて居ります、英人は華奢な食膳法を好みますから、今日同國から佛蘭西に色々珍らしい新食器の參りますのを見ましても分ります。

露西亞式の膳立は佛蘭西式のよりずつと立派で且見事で御座います、斯式

によりますと食卓の上には鉢などを載せません主義で御座います。

食膳を供へますときには、毫しも響が致しませぬやうに致さねばなりません、お給仕をする人は來客の周圍に人影のやうに靜かに歩いて居ります、輕い妙な手付を致しましてコップや小皿などの衝突ませぬやうに取扱はなければなりません。

能く熟練て居ります召使は來客の坐つて居ります席の上下に依りまして一ツの間違もなく食膳を供しますことを知つて居ります。

第一に食膳を供すべき人は主人の右に坐つて居りますところの夫人で御座います、次が其左に居ります婦人、それからは右左々々と云ふ順序になります、男子客に付きましても順序は同じて御座います。

令嬢方は主婦の先きに給仕されますのが規則で御座いますけれども、若し主婦が年を取つて居りまして、令嬢の方が年若う御座いますれば、主婦の方が先きに給仕致されますことになります。

若し來賓の中に老人が居られますれば、主婦は召使に合圖致しまして、自分の方に參ります前に、先づ老人の方に給仕致しますやうに知らせます、けれども老人の方で辭退致しますれば、主婦は遠慮しませんで、先きにお給仕して貰ひます、禮法は必ずしも一定不變とは申されません、斯道に精しき人は之を加減致しますことが出來ます。

召使は食品を左の方から進めます、進めますときには低く致しまして、客が容易く取られますやうに致します、若し食物にソースが入用で御座います

れば、他の召使がソース器を差出します、或は一人の召使が一方の手にソース器を持つて居りますことも御座います。

盛宴のときに、召使を食膳のお給仕に致しますときには、制服を着せますのが規則で御座いますけれども、多くは略服を着せまして佛蘭西式の服裝に白木綿の手袋を嵌めさせます、炊事方は何時も黑服で御座いますが、手袋は嵌めません。

(七)大宴會の禮式

大宴會と申まして、公式的に開きますところの盛宴は氣の利いた會席料理と毫しも違ひは御座いません、儀式の上から開きますので、其の單調でありますこと少しも趣味が御座いません。

廣大なる邸宅でゞも御座いませんければ、大勢來客がありますときは、主婦が其の家で料理を調へますことが六箇敷う御座いまして、特別に料理を注文致しますやうになりますから、之が爲に主婦の愛嬌を悉く奪つて了ひます。

此の宴會を引受けますところの特別の料理店が御座いまして、皿、鉢、點燈、炊事方、料理番等一切のものを貸しまして、何から何まで皆んな注文に應じて居ります。

近年は又之に似寄りました風が大に流行りまして、家に面倒が御座いませんと申すところから、會席料理店を貸りまして、家からは、或る道具を運び、召使までも使はしまして、料理店の炊事方と一緒に立働かせます。

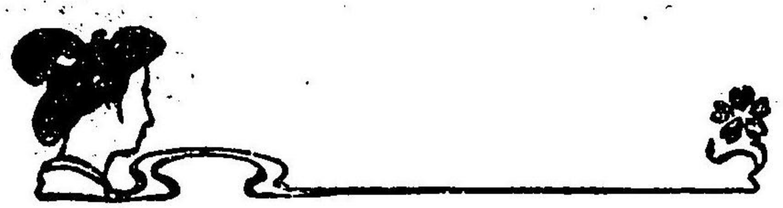
巴里婦人の宴會振

是は純然たる料理店で開きます宴會とは少しく趣を異に致して居りまして家庭と料理店とのチャンポンの宴會で御座いますから、幾分か可笑な所も減じて居ります。

さて家庭に於いて開きます大宴會に就て申ますれば、最早來客が三十人以上も御座いますときは、是非大食膳と小食膳とを準備致さねばなりません。

小食膳はずつと人數が少う御座いまして、客の座席は一緯に致しまして示して置きます、多くは客の參りましたときに渡しますところの花若くはリボンの結方に依りまして各來客が坐りますところの席を示すので御座います。

小食膳は大きな食堂で御座いましても、場所がなくなつて了ひますから、入口の間とか、小さな別客室とか、又は書籍室とかに之を設けますけれども、



應接の客室と喫煙室とには決して之を設けません、何せと申ますれば、此の二ツの部屋は食後來賓の爲に殘して置かねばなりませんから。

此等の食膳法は多く大宴會に於て行はれますので御座いまして、特に夜會、舞踏會などに應用せられますもので御座います。

盛宴の時間は大抵八時と定まつて居ります、招待狀に多くは時間を記して御座いますが、若し記して御座いませんければ、七時四十五分位までに參りますれば確に宴會の定時に間に合ひます。

(八)親友間の宴會

主婦が日常の献立を作りますことは餘程六箇敷う御座います、日常の献立は盛宴よりも質素で御座いますけれども一層複雜致して居ります、何せと申

ますれば、是と云ふ規則が御座いませんで、各々多少自分の嗜好職業などに依りまして都合を致します、朝餉の時間で御座いましても、人に依つて違ひますことが御座います。

一番困りますことは、思も寄らぬ客が不意に参りますことで御座います、時々は良人が伴れて参りますこともで御座います、而も夕方では御座いませんで午前でありますと一層狼狽致します、で何時も食膳を充分に備へまして、何時客が参りましても、一人前や二人前は直ぐに供せられますやうに致して置かなければなりません。

主婦は女性の性質で御座いますところの緻密なる考を以て、毎日家庭に行はれます細事までに念が届いて居らねばなりません、各自の嗜好なども心得

て居りませんければなりません、以前來客のありました節には何う云ふ御馳走を出しましたかと記憶して居らねばなりません。

老人に進めます料理と二十歳前後の少壯なる人に進めます料理とは同じでは御座いません、老人に進めますものは成るべく輕くて消化し易いものでなければなりません。

現今では何處の家でも普通の食膳の上に、白葡萄酒、赤葡萄酒、ビールや牛乳までも添へて出しますことが流行ります。

主婦が此等の細心は無論家族間又は親友間に於てばかり行はれますので御座いまして、社會的階級が上流の方になりますほど、此種の念入りの接待振がなくなりまして、隨て献立が規則的になりますので御座います。

(九)食べ方

教育のある人とない人とは食堂で分ります、食堂は人の高下を知らしめるに爭はれぬ所で御座います、幼少の時から鄭寧な禮に慣れて居ります人は、其禮が習ひ性となりまして、考へませんでも自然にさういふ風に行はねばなりませぬやうになります、假令其に何んなに貧乏な境遇に陷ることが御座いましても、食卓に就きますときには矢張ちやんと禮を崩しませんから、儀式の八釜敷い人で御座いましても、其人と一緒に食卓に就くことを嫌ひます。

食べ方を心得て居ります人は自由に手を動かしましても、爲すことが凡て禮法に當つて居りますから、毫しも野卑に見えません。

誰でも食べませぬ人は御座いませんから、食べ方を心得て居らねばなりません。

口拭は膝の上に擴げて置きますけれども、皆んな一ッぱいに擴げます筈では御座いません。

スープのお代りを致してはいけません、お皿の中にはいつも少し位殘つて居りますやうに致して置かなければなりません、お皿を彼方へ傾け此方へ傾けたり致しまして、中のものを悉く掬ひ取る筈では御座いません。

骨を口に當てゝはいけません、骨に附いて居ります肉は庖丁と肉刺で上手に離しまして、肉片は食べます度毎に、一片々々づゝ切つて食べます、パンをソースの中に浸して食べません、野菜もソースの中に入れて潰しません。

パンをも切りません、先づ之を二ッに割りまして、左の手に御座います半分を皿の左に置きまして、右手の半分を食べます度毎に小さく割つて食べます。

口拭は唇を拭く爲で御座いますが、決して角で拭きましてはいけません、飲みます前と飲みます度毎に、端で拭きますやうに致さねばなりません。

骨又は核などを皿の上に出さなければなりませぬやうな場合には、唇の間から指の先きでそつと取り出しまして上手に致さねばなりません。

召使が來客に皿を進めますときには客の左の方から出しますけれども、酒を進めますときには客の右の方から致します。

給仕の人に難有うと申しますのは禮では御座いません、コップを擧げまし

て受けたり、又は充分で御座いますなどの意を示す筈でも御座いません、能く慣れて居ります給仕は一寸致した擧動でそれと分りますから。

魚を食べますときには銀製の特別の食器匙と肉刺とが御座いますけれども若し之がありませんければ、自分の肉刺ばかりを用ひまして、左の手ではパンの小片を取りまして、それで骨を拔く助けに致す筈で御座います、魚と一緒にパンを食べませんでも宜しう御座います。

蝦又は蟹などが出ましたときには、今日ではそれを割りますところの食器が御座いますから、造作もありません、唯それの用ひ方だけを知つて居りますれば宜しう御座います、一番善う御座いますのは自分が使ひます前に人の使ひますのを見ますれば宜うございます、其れでも自分には上手に使へませ

んと思ひましたならば、食べ方を知らぬものを辭退致しますれば、可いので御座います、此の方法は凡ての新らしき料理、又は未だ知らない食器に就て應用して參られます、新料理の食べ方と使用法とを知りませんときには、是非それより外仕方が御座いません。

朝鮮薊の葉を離します食器は發見されませんから、常には此の野菜の根の方ばかりを宴會に出します、家族ばかりの食卓には根も葉も出して宜しう御座います。

天門冬を肉刺で食べます風は英國から參りましたと申しますけれども、實は佛蘭西から出ましたので御座います、それは十八世紀の頃、侯爵夫人方は天門冬の尖端を庖丁で切りまして、それを直ぐに肉刺で食べました、で此の

野菜の食べ方は矢張り佛蘭西式と申して宜しうございます、けれども近頃は天門冬鋏と申すものが出來ましたから、此風が變つて參りました。

此の天門冬鋏は特別な皿と一緒に出します、其の形は小さな繪具皿のやうな風に致しまして、中にソースを容れます。

家に依りましては英吉利式に致しまして、肉と一緒に菜羹を出します所も御座います、之を食べますには左の手の肉刺と右の手の庖丁とを離しませんやうに致します方が宜しう御座います、肉の小片を切りまして後之を肉刺で刺します、それから庖丁で野菜を少しばかり肉片の上にあげまして、それを左の手で口に持つて行きますので御座います。

サラダも特別の食器と共に出します、サラダ器から皿に取ります間に葉を

落しませんやうに氣を附けなければなりませんから大變に面倒で御座います

サラダは成るべく小さく切る筈で御座います、若し小さく切つて御座いませんければ、肉刺の端で葉を摧く筈でありまして、庖丁で致してはいけません。

大抵凡ての野菜は肉刺の圓匙を鍬のやうに使つて食べられます、先づ肉刺で野菜を寄せ集めて置きまして、それを落ちませんやうに掬ひまして靜に口の所へ持つて參りますので御座います。

半熟の卵は中々食べにくう御座います、先づ卵を左の手に持ちまして肉刺の端でポンと一ッ打き、殼の破れましたところで肉刺の齒を入れ、卵を押へながら、左の手で卵の容器を廻はし、夫から右の手で少し搖りますれば直ぐに卵の上の方が離れて了ひます。

之を食べますときには匙で食べます、匙で皿の上に殼を摧いて了ひます。

後食品の爲には特別の食器が御座います、銀製若くは金鍍の銀製の庖丁のやうなもので御座います、庖丁は決して口の側へ持つて參る筈では御座いませんから、乾酪を庖丁で食べてはいけません、右の手で乾酪の小片を切りまして庖丁でそれをパン片の上にあげ、又それを左の手に持ちまして口に入れます筈で御座います。

果實は凡て庖丁と肉刺とで皮を剝きます、桃、梨、檎子などの果物は之を四つに切りまして、其の切りました部分を堅く肉刺で刺しまして、其の肉刺を左の手で皿の上に持ちながら右手の庖丁で皮を剝きます、而して剝きました部分を皿の上に置きまして、中の心を取り、夫れから之を細かく切ります、

桃などには砂糖を振りかけます。

櫻實其他核のあります小さな果物などは、左の手で之を口に入れ、後食用の匙を口に當てまして、其核をそつと取り捨てますので御座います。

菓子なども肉刺で刺されますものは、大抵肉刺を以て食べますやうに致します、紙などを貼りましたものは、手で其紙を剝ぎますことは安う御座います。

飲物を飲みますときには、コップを靜に持ちまして體裁好く飲む筈で御座います、脚附きの小さなコップで御座いますれば、無論其の脚部を持ちますけれども、大コップで御座いますればしつかり握りますやうに致して持ちます。

決してコップを一息で飲み干す筈では御座いません、靜に默つて居りまして、休み〳〵滴々に飲みます筈で御座います。

宴會には食品を換へます度毎に皿を取換へる筈で御座います、けれども取換へませんければ氣を附けませんやうな風に致しまして、副食品の出ます時まで、皿を側に置きます筈で御座います、副食品の出ました時に初めて肉刺と庖丁とを皿の上に置きますれば宜しう御座います。

進められました料理を一々食べなければならぬと思ふ筈では御座いません普通の宴會に於きまして、主人夫婦は食品を出しますときに召食るやうに勸めますけれども、强て勸めは致しません、客の方では食べますにも、斷りますにも理由を申すには及びません。

召使が給仕致しましたときは、頭を振つて斷りますれば、直ぐに次席の客に持つて參ります。

食卓に就きます心得と致しましては、先づチャンと姿勢を正しく致しまして、身を傾けないやうに致さなければなりません、けれども餘り堅苦しく御座いませんやうに、氣を附けなければなりません、話を致しますときには、顏を右又は左に向けますか、背を左右の客に向けませんやうに注意致さねばなりません。

口拭は殘らず擴げません隨て之を胴に捲付けましたり、又は首の方に持つて參りましたり致してはいけません、食事の後には折らずに食卓の上にあげて置きますが、餘り大きな形になりませぬやうに致して置かねばなりません。

若し肉刺か庖丁を誤つて落しましたならば、直ぐに取上げて、パンの屑で、之を拭く筈で御座います、澤山食器がないと思ひますときには、是非其の通りに致さなければなりません、さもなくばお給仕が見付けますと、直ぐに別の食器を持つて參ります。

何處でも鼻を歡みますときには靜かに致す筈で御座いますが、食事の際には尙一層氣を附まして靜に歡む筈で御座います、鼻を彼方へ採つたり、此方へ振つたり致しましては、禮儀作法を知らない者が致す業で御座います、嚮なしに直ぐに歡みますのが一番宜しう御座います。

婦人は扇に就きまして大變心配致しますから、若し食器の都合で出來ますことでありますれば、皿の側に置く筈で御座います、さもなくば手袋と共に

膝の上に置く筈で御座います、食卓を立ちますときに忘れませんやうに致さねばなりません、さうで御座いませんと、下に落しまして自分で拾ひますとか、人に拾つて貰ひますとか致さねばなりません。

(十)食品を切つて供する方法

能く切つて出すと云ふことは一種の手際で御座いまして、却々疎忽に出來ぬもので御座います。

此法を學びますには、上手な人が自分の前に切つて居りますのを見て、實地的に學びますのが一番捷徑で御座います。

切りますときには手際と注意と清潔と、尙又優なる風を示さなければなりません。

牛肉、魚肉、鳥肉を細かに奇麗に切つて御座いますのを見ますときには、實に見事で御座います。

偖先づ能く切りますには、第一能く切れる庖丁がなければなりません、夫から鳥獸肉を切りますときには、庖丁の尖で關節のところを探つて見付ける筈で御座います。

凡て牛肉は截肉でも腿肉でも横片に切る筈では御座いません、各片に少しつゝ脂質のところが附いて居らなければなりません。

犢牛の肉の脊部は細片に切りまして、脊骨内の肉は横片に切ります筈で御座います。

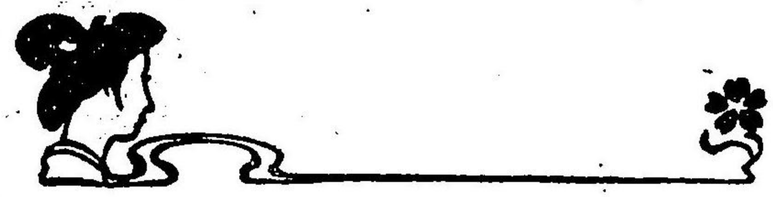
羊の肉は腿肉が一番上等で御座いまして、之には二通りの切り方が御座い

ます、英國式に依りますれば、腿肉を極細かく横に切ります、佛蘭西式に依りますれば、之を眞直に少々厚みに切ります。

小羊は四ッ切りに致して供します、鹿の腿肉は四ッ切りか又は斜に切つて出します、ジャンボンは種々の切り方が御座います。

雛肉は先づ初に腿と翼とを附着して居ります皮を、庖丁の尖で剝ぎます、夫から庖丁と肉刺とで腿肉を離し取つて丁ひます、若し雛が大きう御座いますれば三ッに切り、小さう御座いますれば二ッに切りまして、其後に殘りの兩翼を離して丁ひます。

雉も同じやうに致します、雉の一番甘い肉片は白う御座います、山鶉などは腿を珍重致します。



鳩は大きう御座いますときは雛のやうに切り、小さう御座いますれば、脊から二ッに割ります。

切る庖丁と致しましては、腿などの爲には尖の鋭い大きな庖丁を附けて出します、家禽や鳥などの爲には、短かく薄い庖丁を出します、魚の爲には又別の庖丁が御座います。

(十一)來賓の心得

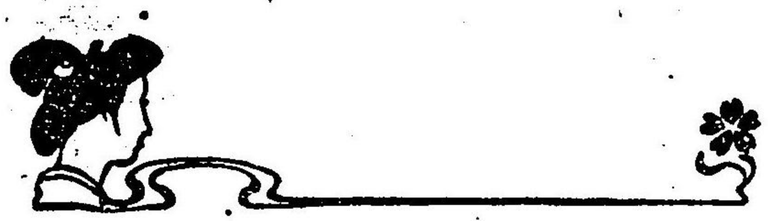
來賓は食事の時刻より凡そ十分前に參る筈で御座います、それより先きに參りましてはいけません、けれども地位や境遇などの都合によりまして其樣にチャンと時間を守りますことは出來ませんところの來賓には多少の猶豫を與へて置きます、例へば醫者、學士會員、僧侶及び代議士(議會で留められ

て居りますとき）などは少し位待つて貰はれます特權を有つて居ります。

別に用事の御座いません人はチャンと時間を守らなければなりません、何んな口實を設けましても恕されません、で是非とも此の禮法に從はなければなりません。

宴會が甘味く出來ませんときにも、來賓は氣が附かぬ振を致しまして、居らなければなりません、何を出されましても結構なものとして戴きまして、接待役に氣を揉ませますやうに致してはいけません。

供せられました食膳が體裁惡う御座いましても、又粗末のやうに思はれましても、口には合ひませんと申すやうに、口の先きに厭々らしく、食べますやうな風を致してはいけません。

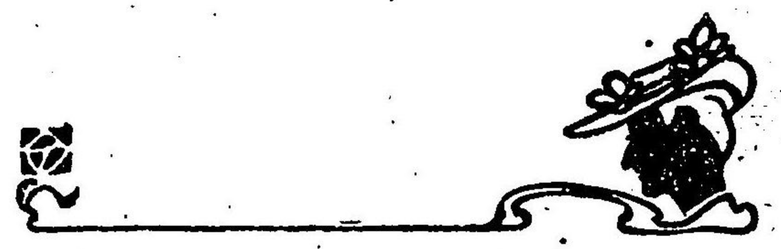


茲に父人の餘り氣が附きませんことが一つ御座います、それは主人主婦が自ら出まして何か進めますときには之を他の客に廻しませず頂戴致す筈で御座います、自分で戴くべきものを他の客に廻はしてあげますと、客に對しては禮を盡しましたので御座いませうが、却て主人に對しましては氣を害なひますやうになります、或は主人はわざ〳〵特別に差上げたいと思ふところのものを供して呉れましたかも知れません。

是は大抵の人が皆能く知つて居ります所で御座いますが、パンの片を以て皿の中のソースを拭き取つて食べますことは禮では御座いません。

猶又前にも申しましたが、コップの中の飲物は一滴も洩しませぬやうに、奇麗に飲み干してはいけません。

巴里婦人の宴會振



餘り低聲にて客と話を致しましても秘密話のやうに思はれていけませんがさりとて餘り高調子で話を致しますのも大勢の耳を欹てしめて邪魔になりますから、矢張り慎まなればなりません。

(十二)祝杯の法式

祝杯を擧げますことは古い風で御座いまして一時廢りましたが、今又再興されるやうになりました。

公式の宴會に於きましては、祝杯を擧げますときの祝辭も、答辭も共に知れて居りまして、是れ無暗に心に浮びましたことを述べますので御座いませんから、美風と申さなければなりません。

然し祝杯の辭は即時に述べますことも御座いますし、諳誦致して申ますこ

とも御座いますし、又書きましたのを朗讀致しますことも御座います、記憶致して置きますことに就きまして心配で御座いますれば、祝辭を朗讀的に述べますのが一番善い仕方で御座います。

家族的宴會のときには、結婚式とか受洗式とか、又は他の祝慶式とに依りまして祝杯の辭が各々違ひますけれども、概して簡單で且感動を惹起しますやうに述べます、一座の中に重立つて居ります人が皆に代りまして、即時に同情を籠めました祝辭を述べますと、一座が皆之に應じまして同意を表はしますので御座いますから、實に嬉しう御座います。

位地や、年齢の特別の理由に依りまして、祝辭を述べます特權を有つて居りませんければ、無暗に口を出す筈では御座いません。

結婚式の宴會に於きまして、祝辭が御座いましたときには、新郎の父若くは新婦の父が答辭を述べます。

受洗式の宴會には、子供の父が答辭を述べます。

祝杯の辭と致しまして、特別に式文のやうになつて居りますものが御座いませんけれども、大抵は「私は何々の爲に祝杯を擧げます」と申すやうになつて居ります。

祝辭を述べます人は起立して、杯を顏の邊まで擧げまして、其の健康を祝ひたいと思ひます人の方に向ひまして身を傾けます。

此時來賓が皆起立しまして、「何某樣に」若くは「何夫人に」と申ながら杯をかちあはせます。

婦人の方は微笑を帶びながら、健康を祝します人の方に向ひまして杯を擧げます丈けで御座います。

祝辭を受けます當人は必ず答辭を述べます、起立して左の通り「私も今日わざ〳〵御來會下されました御一同皆樣の爲に祝杯を擧げますと申します。

國に依りましては祝辭は際限もなく、繰返されて參ります、英國は殊更繰返されます方で御座います。

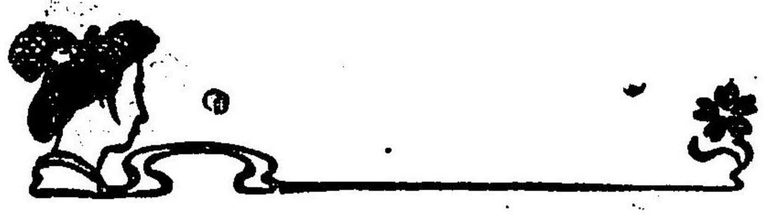
(十三)食後の接待法

宴會が畢りますや否や、主婦は座を立ちまして、先きに食堂に參りましたときと同じ順序に依つて食堂に入つて參ります、但だ主婦が一行の先きに立つて參ります丈けが違ひます、客室の溫度は適宜に致して置きまして、食堂

の温度を加減して參らなければなりません、燈火を四方に點じて置きまして、室内が光明くて如何にも嬉しく且賑はしく致して置かなければなりません。

其間に珈琲を進めまして、男子客は多く喫煙室に入ります、主婦は婦人客に向ひまして、「若や化粧室にお入りになる、必要は御座いませんか、」と優しく伺つて見ます。

宴會が濟みまして後に時々親しい友達を招きまして興を助けて貰ひますことが御座います、之は主婦に取りまして大に力になります、來客は食事中に最早言ふ丈のことを言つて了つて居りますから、此時意外の客が入つて參りますと、再び一座が賑合つて花を咲かせます故皆さんが之を歡迎致します。



此時招待致されまして來會する人々は前の宴會で招待されました人々で半ば返禮旁々參りますので御座います。

此時は或は音樂が始まり、或は舞踏が始まり、或は又内密に骨牌などを弄びまして、何れも歡を盡します。

主人夫婦は來客が皆愉快を極めて歸りますやうに色々と斡旋致しますので御座います。

參られました人々が極親密の間柄で御座いますれば、十時若くは十時半頃に茶菓を饗應致します。

（十四）珈琲の進め方

珈琲を進めます方法に二通り御座います、來賓皆親しき間柄で禮儀にも何

にも拘りませず、談笑して永く食堂に話をして居りますときには食卓の上で供します。

さもなくば給仕が盆の上に珈琲器茶腕ブランデ砂糖器を載せまして、客室喫煙室又は庭園などに持つて參ります、珈琲を供します者は主婦で御座いまして、令嬢若くは親しく致して居ります婦人が之を手傳ひます、けれども時々は給仕に之を任せて置きますことが御座います。

婦人方の爲にはブランデに何か甘味い飲物を添へます、例へて申しますればアンセット酒とか又はシャルトルーズ酒のやうなものを供するので御座います。

覆盆酒又は凡て自宅製の飲物は親しい間柄で御座いませんければ呈供ません。

珈琲の初出を第一番に一座の中、最も重立ちましたお客様に進めます、餘り澤山注込まして、砂糖を入れますとき溢れるやうに致してはいけません。

珈琲茶碗は右の手に持つて差上げ砂糖器は左の手に持つて居ります、珈琲に入れますところの砂糖の分量は各自の希望に依つて違ひます。

(十五)喫煙室の接待法

暫時客室に話を致して、珈琲を飲みました後、主人は男子客を案内致して喫煙室に伴れて參ります、來客が大勢で御座いますれば、珈琲は喫煙室でも、客室でも何處の方にでも出して宜いので御座います、若又左程大勢では御座いませんければ、珈琲を先きに客室で飲みました後、飲物ばかりを客

室に置きます。

煙草、葉巻、巻煙草などは來賓が隨意に取つて喫煙せられるやうに致して置きます、喫煙用アルコール小洋燈を置きますのはマッチよりも便利で御座います。

喫煙室には男子客は暫く話を致して居ります、是は男子に取ましては最も愉快で御座います、主人は自室に居りまして意氣の投合さうな方を特別に紹介致します、又相互に知合になりたいと思ふ人々の間に立つて世話をやいて居りますことが御座いますから、之で時々大層親しい友達になりますことが御座います。

喫煙室には居りたい程居ましても宜しう御座います、けれども婦人客が客

室に居りますことを全く忘れてはいけません。

(十六)茶菓の饗應法

今日では交際社會の婦人は大抵皆面會日を定めまして、多くの來訪者に茶と其他の食品を供します風が御座います。

午後二時頃即ち主婦が客に應接致します時刻に、客室の隅に小さなテーブルを出しまして、菓子だの、サンドウイッチだの又は甘い酒などを供します、四時頃になりましてから、初めて茶を進めます、此の茶は熱く致して置きまして六時半まで保たせて置きます。

茶を載せます臺を見事に飾りまして、其の上に日本の陶器、虹色のコップ水差瓶、チョコレート器、露西亞の茶瓶などを奇麗に載せて置きます、茶は

少しでも長く茶瓶に入れて置きますと、苦くなりますから、時々水を差します。

茶菓を饗應致しますのは主婦で御座いまして令嬢又は日頃親しく致して居ります妙齢の女子に手傳はせます、此方達が臺の側に居りまして、來訪の客毎に茶やチョコレートなどを進めますけれども、若し男子客で御座いますれば、客自らが臺の方に進みまして お嬢さんの勞を省きますやうに致します。

家に若い娘が居りませんければ、主婦は息子、兄弟又は若い男の子を以て娘の代りに致させます。

家に依りましては召使が大きな盆を持つて參りまして、其の上にサンドウイッチだの菓子だの、又は砂糖栗などを載せて參りますけれども、是は餘り

一般に見受けられません、そんなこと致して居りました日には、客は始終代り〴〵參られますから、其間に召使が何時までも其處に止まつて居らなければなりません。

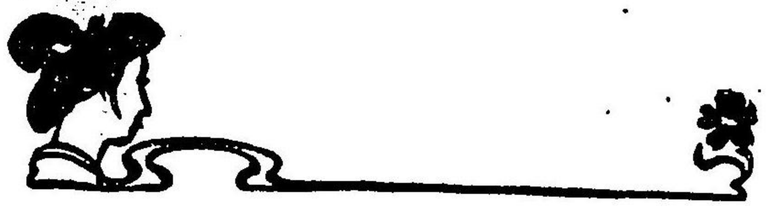
第五章　巴里婦人の夜會振及舞踏會振

(二)客室の裝飾法

客室の整理は全く主婦の權にありますことで御座います、室内の裝飾を始めとしまして、何から何まで、皆んな主婦の指圖を待ちませんければなりません、主婦は又何事をも綿密に調べまして、用意が周到で、毫しにても遺漏のありませんやうに氣を附けて居らねばなりません。

招待致されました客は皆主婦の周邊に團欒致します、それで主婦は當夜の全權を握りまして、萬事を支配致しますので御座います、依估負の沙汰がなく、萬人に氣に入りますやうに務めまして、來賓に對しましては銘々に愛嬌を振り蒔きまして、所謂八方美人主義を取りまして、誰の氣をも反らしませぬやうに致します、若し相互に識らない人が御座いますれば、鄭重親切に紹介致します、主婦の身裝は華美で、嚴肅の點の現はれませぬやうに致して居ります。

若し主人夫婦に親族が御座いまして、其の親族が夜會に出席致しますれば之を敬ひまして上席を讓ります、而して自らは成るべく其前に目立ちませぬやうに務めます、若又來賓の中に其の親族に識れませぬ人が御座いますれば

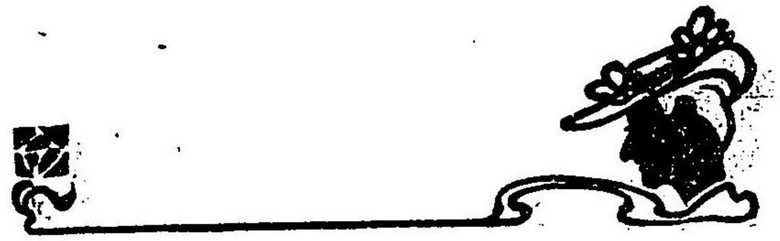


先づ誰よりも先きに其人を紹介致します。

主人夫婦は其日の內に萬事召使に吩咐けて置かねばなりません、若も夜會が始まりましてから、何か吩咐けなければならぬ事が起りますれば、成るべく低聲に話を致しまして、來賓に知れませぬやうに致さなければなりません召使は又恭しく頭を垂れまして、耳を傾けて直ぐに其の吩咐けられますことを聽取りますやうに氣を附けて居らなければなりません。

(二)舞踏會の準備法

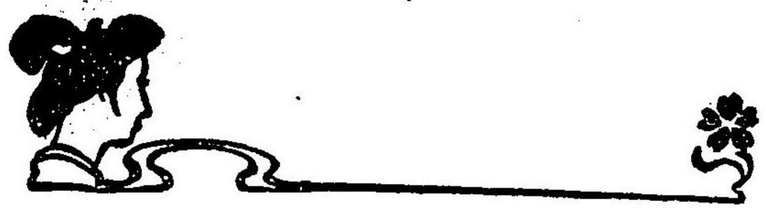
舞踏會の準備を致しますことは中々六箇敷いことで御座いますから、多くは斯道の經驗のあります人を雇ひまして、萬事其準備を致させます者が多う御座います。



是は幸ひ巴里に於きましては容易く出來ますことで御座いますが、凡ての婦人が皆んな巴里にばかり住んで居るとも限りませんから、之に就て幾分かの心得がなければなりません。

大館を有つて居りまして直ぐにそれを舞踏室に變じて了うと云ふやうで御座いませんければ、是非とも或室内の大きな道具を移しまして充分廣い場所を作らねばなりません。

此の室内には壁に沿ひまして椅子を并べて据付けますが、部屋が狹う御座いますときには、長い腰掛の方が却て便利で御座います、何せと申しますれば椅子のやうにがたぐも致しませんし、それに又椅子よりも多くの人が坐られます。



小夜會で御座いませんければ、絨緞は捲いて取つて了ひます、其儘敷いて置き度いと思ひますときは、上に舞踏用の敷物を敷かねばなりません、一番廣き間の隅の方には音樂人の爲に臺を高く据付けて置きます、花草樹木を以て藪のやうなものを作りまして、此等の据付物を隱して了ひます、大きな舞踏會になりますと、一組のオルケットルが必要で御座います、けれども小夜會で御座いますれば、ピアノ、ヴィオロン(ヴアイオリン)及びピストン位で澤山で御座います。

室内には何處から何處まで綠樹花木を飾りますから、是が舞踏室に於て一番立派な裝飾で御座います、戸窓壁までも、花束を以て飾りますから其の美しさは實に何んとも申されません。

室内が華美になり隨て夜會が賑はしくなりますのは、多く燈光に依りますもので御座いますから、電燈球又は花形の電燈等を設けまして、光明が四邊を照すやうに致して置きます、電燈の光と戸壁の自然の花と相映じて居りますときには、宛然樂園で花見遊山でも致すやうな心地が致されます。

食堂には食膳がチャンと準備されて居りまして、夜會の央若くは終りに食事が出來ますやうに致して置きます。

玄關に近い部屋も立派に飾り、道具も奇麗に片附けて置きますから、來賓が其處に置きましたものを何時尋ねに參りましても、直ぐに見附けられますやうに、何から何まで皆善く調べて置きます。

婦人客特に舞踏を致す婦人客の爲には、特別の室を設けて置きまして、其

室には一人の侍女が居り、何事も用を辨じて居ます、一切の化粧品は皆此處に備へて置きますので、御座います。

若し馬車などを入れます處が御座いませんければ、門外にテントを張りまして雨用心を致して置きます。

來賓の歸りますときには、直ぐに自分の車馬が見附かりますやうにと、是も亦注意致して置きます。

馭者や馬丁などに早く馬車を持つて參らせますやうに、世話を燒く者を門に附けて置きます。

戸外の警衛に就きましては、夜會のことを豫め警吏に通じて置きまして、巡査が萬事之を引受けて警戒致して居りますから大丈夫で御座います。

(三)夜會及舞踏會の招待狀

夜會及舞踏會の招待狀は遲くも十五日前に廻はして置かねばなりません、若し舞踏會が假裝會で御座いますれば、尙早く廻はして置く筈で御座います服裝を用ひますには相當に時日を要しますから、其邊の事をよく考へなければなりません、特に今日では仕組などが餘程複雜致して居ります。

招待狀は畫用紙大の紙に作りまして、紋形などは附けてはいけません、けれども、假裝舞踏會とか又は特別に裝飾する夜會などの招待狀で御座いますれば此限りでは御座いません、其時には招待狀は當夜の舞踏、又は夜會の性質によりまして美しく招待狀に花模樣だの人物畫などを畫きます。

招待狀の文句は夜會の性質に依りますことで御座います、普通の夜會の招

待狀は簡單なもので御座いまして、始終主婦の名義で廻はします、而して良人を第一の來賓と看做して置きます、文句は左の通りで御座います。

「夫人何某……來る一月八日火曜日には在宅致し候」

若し音樂人との交渉が濟んで居りますれば招待狀の中に但書を入れまして左の通りに書きます。

「但當夜は音樂も之あり候」

若又舞踏が御座いますれば矢張り

「但當夜は舞踏も之あり候」

と記します。

けれども、盛大なる舞踏會になりますと、招待狀の文句が少し長くなりま

す、又主人の名も出て參りますから、正式の招待狀は此の通りに認めます。

「何某氏及何某夫人、何某殿及何某令夫人に、來る何月何日開催の舞踏會に御來會の榮を賜はらんことを希望致し候」

或は單に

「何月何日開催の夜會に御來會あらんことを希望致し候」

と記しまして、

「當夜は舞踏之あるべく候」

と書きましても宜しう御座います。

特別の舞踏會で御座いますれば、例へば假裝會のときは

「假裝會之あるべく候」

と云ふやうに、チヤンと其の舞踏の種類を示しますやうに致します。

此の通り、招待狀に、當日行ひます處の事柄から又當日着用致します服裝までも書き入れますことは近頃流行ります風で御座いますが、之が漸次行はれまして、夜會のみに限りません、招待狀と云ふ招待狀を出します會合でさへありますれば、如何なる會合の際にも採用られますやうになりました、例を申しますならば、遠足や遊散のときにも郊外散歩に出ますときにも、停車場や往復の汽車の時間などまでも記入致しますやうになりましたのは、大層都合好う御座いまして、招待されます客の方でも、萬事に好き都合で便利な案内狀と思はれます。

夜會若くは大舞踏會に招待致しますときには、口頭ばかりで招待致すので